



HOKKAIDO
UNIVERSITY

学院案内 2019

IMCTS

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院
Graduate School of international media, Communication,
and Tourism Studies



変わるメディア、変わる観光。

Message From the Dean

学院長あいさつ

学院長

西川 克之

Katsuyuki Nishikawa



2019年4月から、本学院は従来の国際広報メディア専攻と観光創造専攻からなる二専攻体制をあらため、国際広報メディア・観光学専攻の一専攻として再出発することになりました。以下ではその改組の意図するところについて述べさせていただきます。

現代社会をもっともよく特徴づける事象の一つは流動性の高まりでしょう。情報コミュニケーションは短期間でモバイル化が進み、物流サービスのネットワーク上を休むことなく大量のモノが運ばれ、単なる情報と化した資本が瞬時に移動を繰り返しています。人の移動も常態化しその空間もグローバルな規模でどんどん拡張しています。近代社会の特質としてマルクスが喝破した堅固なものの溶融がいま新たな局面に差し掛かっているという感覚を私たちは免れ得ません。

国際広報メディア・観光学院は、こうした人・モノ・資本・情報の移動性が極大化した時代における広報コミュニケーション、メディア、観光のあり方に関わる教育・研究を領域融合的に実践する極めてユニークな高等教育機関です。企業や自治体の広報活動は情報の受け手との双方向的なコミュニケーションを前提としなければもはや成り立ちませんし、それは世界中の人の目に触れるという可能性を意識したものであらざるを得ません。また、情報コミュニケーション技術の発達によって急速に発展したソーシャルメディアはもちろんのこと、テレビや新聞などの従来のマスメディアも、多対多のネット空間で流通する膨大な情報の海の可能性や限界に向き合わないわけにはいきません。さらに、東アジアをはじめとした経済成長が著しい地域を中心に、移動手段の高速化や情報メディアの多様化という要素とも連関しながら、ほんものとの出会いや異文化との接触を求める観光者の数は飛躍的に増大しています。加えて、こうした情報環境の激変と、社会的交流の拡大によって、少子高齢化に悩む地方地域においてさえ多言語化、多文化化したコミュニケーション環境と無縁ではいられなくなりつつあります。本学院は、2000年に前身である国際広報メディア研究科を創設し、また2007年に二専攻体制の学院に改組して以来、こうした社会環境の変化に伴って発生するアクチュアルな諸課題を解決に導いていくことのできる資質や能力を備えた専門的人材を数多く養成してきました。

さて、こうした教育研究の実績を踏まえつつ、今回の改組によって本学院が目指すのは広報コミュニケーション、メディア研究と観光研究とのさらなる融合です。今後も情報メディア技術の開発はさらに勢いを増して継続し、従来の情報や資本のみではなくさまざまなモノもインターネットでネットワーク化する構想が政策的に進められようとしています。こうしてあらゆるものが情報としてネットワーク上に流通、流動する社会が私たちの目の前に迫っています。一方でまた、観光をはじめとした人的移動や流動も、社会や経済のさらなるグローバル化を背景として拡大していくことは間違いないでしょう。こうした堅固なものとはどこにもないと言い得るような社会変容と向き合い、その背景にある多面的で錯綜した要因を解きほぐしながら探り当て、もって新たに現出する課題を解決して価値を創出できる人材を養成するためには、これまで以上に複合的で融合的な教育プログラムが必要です。本学院は、メディアと観光を専門とする知の集合体という独自性を元手にしつつ、柔軟な協働や臨機の融合という要素を加えることによって、次の社会を見据えて新たな段階に踏み出しました。ここにしかない観光とメディアの融合の場に、多くの皆さまが参画していただくのをお待ちしております。

国際広報メディア・観光学院が養成する「観光メディア人材像」

急速な時代変化により社会課題は高次複合化しています

- メディア活用と地域社会の活性化
- 広報コミュニケーションと観光資源開発
- グローバル化の進行とSociety5.0時代の到来
- 多言語多文化環境と異文化交流

課題解決に向け社会が求める人材能力も高度化しつつあります

新しいコミュニケーションをデザインする能力

- 超スマート社会(Society5.0)における、IoTを活用したコミュニケーションによる新たな価値の創出
- グローバル化と多層化が進む多言語・多文化環境における、地域内での合意形成と海外も含む地域外への情報発信

地方創生に貢献できる能力

- 自地域をデスティネーション(観光目的地)として海外も含めた外の視点から客観的に分析し、地域経営を推進
- 多様なメディアを活用して異文化理解を推進することで交流人口を増大

地域の資源や価値を的確に分析しグローバルに広報・実践する能力

- 観光現象のビックデータ解析と観光目的地のマネジメント、Society5.0の情報メディア環境下での広報コミュニケーション
- 「地域経営力」と「メディア対応力」を融合し、最適化できる能力

新学院は時代の要請に応えた「観光メディア人材」を養成します

- デジタル化やサイバー化が進展する情報環境に対応した、新たな広報実践とメディア活用を開発・推進できる人材
(例:ソーシャルメディアマネージャー、コンテンツプロデューサー等)
- グローバル化と多層化が進む言語・文化環境において、新たなコミュニケーションの形をデザインし、越境的な交流や協働に貢献できる人材
(例:多言語コンテンツマネージャー、多文化共生コーディネーター等)
- デスティネーション分析とメディア対応に関わる知識やスキルを、国際的視点に立って地域経営の現場で応用できる人材
(例:デスティネーションマネージャー、観光デジタルマーケッター等)
- 観光によるまちづくりを推進するために、自治体、企業、地域住民などの諸アクターの協働を図ることのできる人材
(例:地域コミュニケーター、観光まちづくりコーディネーター等)

観光メディア人材の実効的養成のために専攻を一元化します

- 領域横断的な自由で深い教育と研究の実現
- 文系融合、文理融合、企業との連携による多様な教育と研究の実現
- 広報・ジャーナリズム、メディア文化、言語コミュニケーションの領域の教育と研究の充実と連携

何を学ぶことができるのか

前世紀からはじまったグローバル化、情報化、多文化化は21世紀に入り、その速度をはやめています。この巨大な社会変動は、私たちに何をもたらすのでしょうか。

本学院は、現代社会の変化を「公共性と合意」という観点から研究することを出発としました。現代社会はそれらの社会変動により、複数の極への集中が起きると同時に、絶えざる拡散という反対の現象も起こっているからです。加えて、新たなテクノロジー・情報・知識が、政治・経済・文化などさまざまな領域に複合的な変化を与えています。

本学院では、そのような課題にこたえるために、「公共伝達」、「ジャーナリズム」、「広報」、「メディア文化」、「言語」、さらに「観光」の6つの領域を設定して教育を行い、研究を進めてきました。

そして本学院は2019年度に、メディアと観光を融合した新たな大学院に生まれ変わりました。学院を一専攻とし、メディアと観光を統合したコース融合科目を設定し、国際広報メディアを学ぶ学生も、観光創造を学ぶ学生も、共に学び刺激あうカリキュラムとしました。加えて、拡大する観光研究の需要にこたえるために、観光創造研究コースの専門科目を細分化しました。

学生のみなさんは、これまで同様、国際広報メディア研究コースであれば、「国際広報」「公共ジャーナリズム」「言語コミュニケーション」「メディア文化」、さらに観光創造研究コースでは、「観光文化」「交流共創」「観光地域経営」「国際観光開発」といった専門的な科目を受講することができます。加えて、「共通科目」で研究の基盤となる知識を、「コース融合科目」で、メディアと観光を融合した横断的な知識を得ることができ、広い視野をもって、専門的知識を深めることができました。

沿革

IMCTS

2000年4月

北海道大学言語文化部、留学生センター、情報メディア教育研究総合センター（国際コミュニケーション分野）を母体として「大学院国際広報メディア研究科」が発足。

2002年4月

博士後期課程がスタートし、高度な専門研究を実践する研究者の育成が始まる。

2006年4月

観光学高等研究センターが創設され、北大における観光研究が本格的に開始される。

2007年4月

「国際広報メディア研究科」から「国際広報メディア・観光学院」に組織機構及び名称を変更。新たに観光学高等研究センター所属教員を教育スタッフに加えた「観光創造専攻」が誕生し、「国際広報メディア専攻」と「観光創造専攻」の2専攻体制になる。

2019年4月

国際広報メディア・観光学院が一専攻化。



修士課程



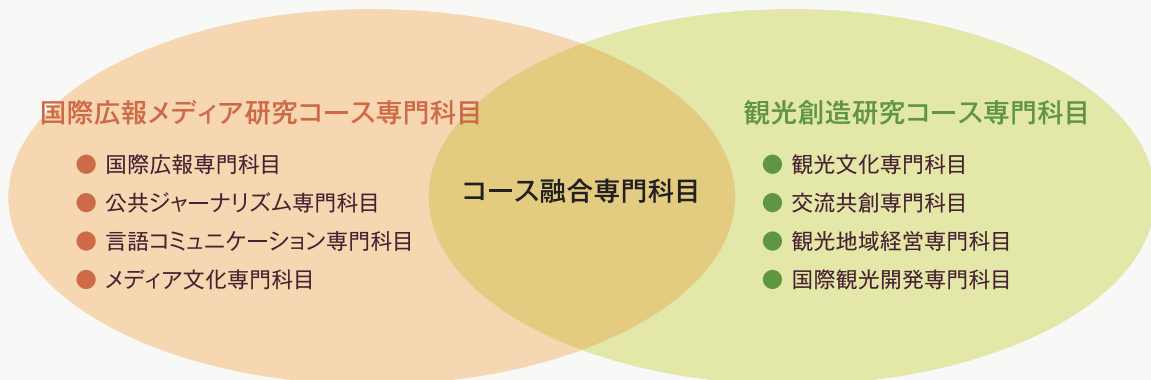
- 1専攻2コース体制で幅広い専門領域に対応
- 社会ニーズに応じた専門科目を各コースごとに設置
- コース横断的な共通科目(講義科目)を選択必修で履修
- コース融合専門科目(演習科目)によりメディアと観光の融合領域に即応
- 文系融合、文理融合、企業連携による多様な授業

《共通科目》

- 基礎共通科目
- 専門共通科目
- 実践共通科目

《選択科目》

コース専門科目 + コース融合専門科目



博士後期課程



- 研究職、専門職など多様な人材を育成
- 博士論文(国際広報メディア・観光学特別研究)以外に研究実践科目とキャリア実践科目を選択必修化

修士研究の発展深化から、修了後の多様なキャリア形成へ
社会人の実務経験や社会活動に関わる諸課題を、より高度な研究へ

《選択必修科目》

研究実践科目

多様なバックグラウンドの学生に応じたスキル・能力の養成

- 国際学会発表
- 国際交流プログラム
TLLP (Tandem Language Learning Project)

キャリア実践科目

専門的研究者のみではなく、社会ニーズに応じた専門的職業人を育成

- キャリア開発研究
進路・職業選択に関わる「キャリアプランニング」の研究と実践
- 博士インターンシップI・II
企業・行政機関等における「インターンシップ(実務体験)」への参加
- 高度実践英語研究I・II

実践的教育



広報広告産業論演習

上條 典夫

(株式会社電通執行役員)

情報、メディア、コミュニケーションの環境は、技術革新により、近年最も大きく変化した分野の一つです。電通は、このようなコミュニケーション分野の日本のトップ企業として、本学院において、広報・広告産業論演習という授業を、学院の創設時から行ってきています。この間、電通自身も、大きく変化しました。海外企業の大型買収などで事業の国際化を急速に進め、また、デジタル技術の革新に対応して、新しいテクノロジーを取り込み、発展させてきたのです。コミュニケーションビジネスはこのように、大きく変化してきました。この授業は、5人の経営幹部の集中講義で行います。そこから、産業としてのメディアとコミュニケーションの最前線を感じとってください。



越智信喜人事局長の授業

実践的メディア・ジャーナリズム論演習

読売新聞社



写真部安齊晃記者の報道写真の授業

読売新聞社の第一線のベテラン記者をはじめとしたメディアのプロが前後期各5回の集中講義方式で行う実践的な授業です。テーマは政治、経済、国際、社会、写真といった報道のほか、世論調査、IT事業、出版など多岐にわたります。メディアの現場における取材、業務への理解を深め、直面する課題について考えます。主眼は理論と実践の融合。将来的に報道、広報、広告、宣伝、観光など関連分野で活躍するための幅広い知識と視野を養います。新聞社が社会で果たす多様な役割をぜひ知ってもらいたいと思います。



International Tourism Management
Tourism and Gastronomy

ペゲロ ダビド

PEGUERO David

(海外招聘教員)

I have worked on the field for hotel management and destination management for over 30 years including Spain, Switzerland, United Kingdom, France, Morocco, Mexico and Dominican Republic. In the class of International Tourism Management, I will share my experience through case study method, and the students can learn the practical tasks of the tourism industry and resort development project from the management perspective. In particular, I will explain how the different entities cooperate and formulate a competitive destination thorough promoting efficient and sustainable investment. Let's open the door to the international hospitality industry through discussions in my class and activities.



産業遺産フィールド実習(三笠・旧住友商船炭鉱立坑機)



観光地域ビジネス論演習

中根 裕

(JTB総研 主席研究員)



観光地域ビジネス論演習

萩野隆二

(JTB横浜支店 地域交流事業担当部長)

明日を支える成長戦略として、観光が大きな期待を担う時代が到来しています。演習では政府の観光政策から各地のケーススタディ、そして道内でのフィールド実習も含め、地域の現場でリアルに起きている実態を把握し、官民協働、観光業と他分野との連携等、ビジネスの視点から観光地域活性化を実践的に学びます。第一線の実務と大学の知をつなぐアクティブな演習にご期待ください。

野村総合研究所

—経営の視点、社会の視点を学ぶ

当学院は、日本を代表するシンクタンク、野村総合研究所(NRI)と、長年にわたり教育、研究において協力関係を築いてきました。同社は、社会の変化、技術の変化を分析すること、その上で、将来の大きな方向を示すこと、そして、具体的な問題解決を図ることをビジネスとしてきました。また、近年は、デジタル化の進展という大きな環境変化のもとで、デジタル技術を活用して生産性や顧客への提供価値を飛躍的に向上させる「デジタル・トランスフォーメーション」の推進などの新しい取り組みも進めています。

学生の皆さんには、同社のトップ・コンサルタント、実務経験者による講義を通じて、実社会で現実に行っていること、さらに新しい変化に関する理解を深め、分析力、洞察力、問題解決力を高めてもらいたいと思います。



開講科目

修士課程

必修科目

授業科目	単位
国際広報メディア・観光学研究(修士論文研究)	6

共通科目

	授業科目	単位
選 択 必 修 科 目	基礎共通科目	
	社会調査法I(定性・フィールドワーク)	1
	社会調査法II(定量・データマイニング)	1
	地域研究	1
	研究倫理と手法	1
	メディアリテラシー	1
	Modern Japanese Studies	1
	専門共通科目	
	地域と観光	1
	メディア文化と観光	1
選 択 科 目	実践共通科目	
	実践演習I(インターンシップ)	1
	実践演習II(インターンシップ)	2
	キャリア開発演習	1
	特別演習	2
	高度実践英語演習I	2
	高度実践英語演習II	2

選択科目 国際広報メディア研究コース専門科目

	授業科目	単位	
A群	国際広報専門科目		
	国際経営論演習I(経営戦略)	2	
	国際経営論演習II(組織)	2	
	国際経営戦略広報論演習	2	
	広報企画論演習	2	
	組織コミュニケーション論演習	2	
B群	公共ジャーナリズム専門科目		
	公共文化論演習	2	
	環境社会論演習	2	
	市民社会論演習	2	
	マスメディア論演習	2	
	メディア社会論演習	2	
	メディア史論演習	2	
	中国メディア論演習	2	
	米国政治メディア論演習	2	
	実践的メディア・ジャーナリズム論演習I	2	
	実践的メディア・ジャーナリズム論演習II	2	
	C群	言語コミュニケーション専門科目	
		言語習得論演習I	2
		言語習得論演習II	2
多言語相関論演習		2	
言語情報処理論演習		2	
日本語論演習		2	
日本語学習論演習		2	
比較日本語論演習		2	
日本語伝達論演習		2	
近現代日本語学演習		2	
D群	メディア文化専門科目		
	現代メディア文化論演習	2	
	ジェンダー社会文化論演習	2	
	エスニック文化社会論演習	2	
	比較文化論演習	2	
	芸術社会論演習	2	
	イメージ論演習	2	
	The Body and Gender	2	



選択科目 **コース融合専門科目**

	授業科目	単位
コース融合専門科目	情報戦略論演習	2
	サービス産業広報論演習	2
	デジタル・コミュニケーション論演習	2
	広報・広告産業論演習	2
	マルチメディア表現論演習	2
	メディア観光表象論演習	2
	観光メディア思想論演習	2
	観光情報メディア論演習	2
	観光マーケティング論演習	2
	観光地域ビジネス論演習	2
	文化越境論演習	2
	ポピュラー文化論演習	2
	メディア人類学演習	2
	公共社会論演習	2
	非営利組織論演習	2
	国際交流論演習	2
	マイノリティ論演習	2
	言語社会論演習	2
	言語コミュニケーション論演習	2
	言語研究方法論演習	2
	言語データ分析論演習	2
	言説分析論演習	2
	言語応用論演習	2
	Political Economy of East Asia	2
Search Strategies, Resource Organization, Management & Sustainab	2	
Film and Tourism	2	

修了要件

- 1 「国際広報メディア・観光学研究」6単位を修得すること。
- 2 共通科目の基礎共通科目から2単位以上、専門共通科目から3単位以上、合計5単位以上を修得すること。
- 3 履修する各コース専門科目から6単位以上(ただし、A~D群のうち異なる二つ以上の群の科目を含む)、及びコース融合専門科目から6単位以上を修得すること。
- 4 以上の要件を満たし、合計34単位以上の修得をもって修了要件とする。

博士後期課程

必修科目

授業科目	単位
国際広報メディア・観光学特別研究(博士論文研究)	10

修了要件

- 1 「国際広報メディア・観光学特別研究」10単位を修得すること。
- 2 選択必修科目から2単位以上を修得すること。
- 3 以上の要件を満たし、合計12単位以上の修得をもって修了要件とする。

選択科目 **観光創造研究コース専門科目**

	授業科目	単位			
A群	観光文化専門科目	観光文化論演習	2		
		観光社会学演習	2		
		観光人類学演習	2		
		ヘリテージ・ツーリズム論演習	2		
		メディア空間論演習	2		
		観光創造論演習	2		
		Tourism and Local Politics	2		
		Tourism Attractions	2		
		B群	交流共創専門科目	共創文化論演習	2
				観光コミュニケーション論演習	2
異文化間コミュニケーション論演習	2				
多文化共生論演習	2				
コンテンツ・ツーリズム論演習	2				
エンタテインメント法社会論演習	2				
C群	観光地域経営専門科目	観光デザイン論演習	2		
		地域創造論演習	2		
		エコツーリズム論演習	2		
		観光地域マネジメント論演習	2		
		ランドスケープ・デザイン論演習	2		
		Tourism and Regional Revitalization	2		
		地域経済論演習	2		
		自然資源マネジメント論演習	2		
		社会資本政策論演習	2		
		D群	国際観光開発専門科目	インバウンド・ツーリズム論演習	2
世界遺産マネジメント論演習	2				
国際開発論演習	2				
文化遺産国際協力論演習	2				
International Tourism Management	2				
Tourism and Gastronomy	2				

選択必修科目 **研究実践科目**

授業科目	単位
国際学会発表	2
国際交流プログラム	2

選択必修科目 **キャリア実践科目**

授業科目	単位
キャリア開発研究	1
博士インターンシップI、II	2
高度実践英語研究I、II	2

地域目線でインバウンド・ツーリズムを捉え、その意義を考える

「国際開発論演習」では、「発展途上国における開発とは何か」について議論を深めつつ、開発ツールとしての観光の有効性や当該分野における日本型の開発協力のあり方を考えます。また「インバウンド・ツーリズム論演習」では、学術・実務の両面において今日最も関心の高いテーマの一つである「インバウンド・ツーリズム」を地域の目線で捉え、外国人旅行者の誘致策だけに留まらず、地域がインバウンド・ツーリズムを推進することの意義やそれが地域に及ぼす影響などについても議論します。いずれの科目においても、国内外の具体的な地域の事例を取り上げながら、議論を進めます。「国際協力」と「インバウンド・ツーリズム」は全く異なるもののように感じるかもしれませんが、実は「いかに外国人旅行者を呼び込むか」というテーマは共通です。「インバウンド・ツーリズムを通して地域が発展するためにはどのような取り組みが必要か」、「そもそも地域にとって発展とは何か」について、共に考え、熱く議論しましょう。



石黒 侑介
ISHIGURO Yusuke

担当授業 /
インバウンド・ツーリズム論演習
国際開発論演習

公益財団法人日本交通公社にてインバウンド・ツーリズム推進に関する調査事業・研究等に従事後、2014年に北海道大学観光学高等研究センター着任。2016年より現職。専門はデザイン・マネジメントにかかる政策と組織。2017年よりスウェーデン・バルセロナ大学ホテル・観光学院客員教授を兼務。

歴史を学ぶ。歴史に学ぶ。

「〇〇は〇〇モンダ」をかるやかに疑うと思います。
テキストアナリシスを使用します。
RやPythonを使用します。



伊藤 孝行
ITO Takayuki

担当授業 /
近現代日本語学演習
Modern Japanese Studies

宮城県仙台市生まれ。國學院大学大学院博士課程後期修了。博士(文学)。専門は国語学、日本語教育。タイ国立タマサート大学・同大学院外国人専任講師、財団法人交流協会台北事務所日本語専門家、公立大学法人名城大学上級准教授を経て、北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院准教授。

ネット情報と消費行動

情報社会における消費者は、その意識の裏側のブラックボックスを通じて、消費購買行動をコントロールされています。ネット上に散在する情報の知覚過程で、SNSのコミュニケーション過程で、消費者の消費行動は予め準備されているのです。

伝統的な4大メディアに加えて登場した5番目のメディア、インターネットの特性を考慮することにより、初めて効果的な情報行動を設計・立案・運営・実行することが可能となります。このような視点を出発点に、ソーシャルメディア全盛時代に相応しい広報・マーケティング領域のメディア戦略を、観光情報行動や消費行動を対象に、総合的に考察していきたいと思っています。

関連する学問領域は、広報論、マーケティング論、メディア効果論、情報行動論、消費行動論、観光情報学等、多岐に渡ります。



伊藤 直哉
ITO Naoya

担当授業 /
情報戦略論演習
社会調査法II

ルーヴァン・カトリック大学(ベルギー)大学院博士課程修了。研究テーマは、広報・マーケティング論、観光情報学、消費行動論等。最近の研究は、CGMの情報環境分析、認知論的行動分析、戦略分析を中心に活動を行っている。研究テーマに貫いているキーワードは「情報行動」。情報を切り口に、それぞれの個別研究テーマは通底している。社会科学の立場から、社会科学と情報科学の融合を目指している。

「景観」から「風景」へ 一参加型で地域環境を形成する一

「風景」は、物理的な環境(景観)に個人的な感情や社会的な意味が結びついた学際的なアプローチです。「まちづくりの総仕上げ」と言われる観光において、地域環境を参加型で守り育てるためには、人々の視点から地域を見る「風景」のアプローチが大変有効です。実際にこれまで、人々の風景認識から自然環境の文化的な意味づけの国際比較研究を行ったり、国内外の農山漁村を対象としたフィールドワークや社会実験を行ったりして、観光まちづくりにつながる研究を行ってきました。それらを発展させ、主観的な環境の見方から、場所への愛着、地域資源マネジメントの実証的な計画研究を進めています。みなさんとともに、地域の魅力を「見える化」し、その価値を人々と共有するための方法について考えていきたいと思います。



上田 裕文
UEDA Hirofumi

担当授業 /
社会調査法(定性・フィールドワーク)、
ランドスケープデザイン論演習

留萌生まれ。東京大学農学部森林環境科学専修卒業後、東京大学大学院農学生命科学研究科森林科学専攻修了。ドイツ学術交流会(DAAD)奨学生としてカッセル大学建築・都市計画・景観計画学部、都市・地域社会科学にてDr. rer. pol. (経済社会科学博士)を取得。札幌市立大学デザイン学部を経て現職。専門は風景計画。著書に、『The Image of the Forest』(Sudwestdeutsche Verlag für Hochschulschriften, 2010)、『こんな樹木葬で眠りたい』(旬報社, 2018)他。

イメージからメディアを考える

授業では、私たちが日々取り巻いて、時に心を惹きつけてやまないイメージの力について考える。イメージがその燦然たる輝きによって私たちに惹きつけるとき、そこにはいかなる力が働いているのか。人を虜にしてしまうほど魅力的なイメージがなぜ徹底的な破壊の対象に反転してしまうのか。こうしたイメージの生成と破壊の機構について、イメージの可視性と媒体について考察するほか、芸術におけるイメージの変容過程、現代文化における表象行為の意味についても考える。ロシア文化論が専門なので、近代ロシアの聖像破壊と展示空間についても論じる。受講者には視覚文化論、表象文化論、現代アート、イメージ人類学等に関心のある人が多い。



宇佐見 森吉
USAMI Shinkichi

担当授業 /
イメージ論演習

早稲田大学大学院文学研究科ロシア文学専攻博士後期課程単位取得退学。共著書に『現代ロシア文化』(国書刊行会2000)、『文化の透視法』(南雲フェニックス2008)、『知っておきたいロシア文学』(明治書院2011)、共訳書に『ポエジヤー―言葉の復活』(国書刊行会1995)、『タルコフスキーの世界』(キネマ旬報社1995)ほか



近世のチラシと現代のTwitterは似ている？

ラジオやテレビなどの放送メディア、インターネットやSNSなどの電子メディアの隆盛期を迎え、紙媒体の活字メディア新聞の存在はすっかり色褪せてしまいました。しかし情報が載る「媒体」は変わっても、ニュースを求める私たちの行動は変わらないようです。なぜ人間は直接体験に基づく情報以外に、いろいろなコミュニケーションを通じて情報を求めるのでしょうか。そうした欲求を最初にシステムとして満足させようとしたものが新聞だと思えます。21世紀の人間が17世紀の人間よりも特別賢くなったとも思えません、本質が変わるとも思えません。私たちの情報行動の原点を新聞が成立した時代をヒントに一緒に考えてみませんか。



江口 豊
EGUCHI Yutaka
担当授業/
メディア史論演習

名古屋大学、マールブルク大学、北海道大学大学院文学研究科、デュッセルドルフ大学でドイツ語学を専攻。マインハイムドイツ語研究所、チューリヒ大学ジャーナリズム・メディア学研究所にて客員研究員。16世紀、17世紀のドイツ語圏におけるメディア事象、とくに新聞成立史を研究中。

Humanist tourism scholar with an interest in education

I have worked soon three decades both in the tourism and hospitality industries, and in vocational and higher education related to the industries, in several European and Asian countries, and in Australia. Behind most of my research lies a deeply rooted aim for humanism and equality, often using different popular culture sources, such as advertisements, movies, and cartoons, as data collection sites.



エデルヘイム ヨハン
EDEIHEIM Johan
担当授業/
Tourism Attractions

I am by nature curious. I have a PhD in cultural studies, certificates in philosophy, and in higher education, an MBA, a PgDip tourism, a BA in education, an associate degree in hospitality management, and I am a qualified chef. I have taught, researched, and held managerial positions at vocational and higher education institutions in three continents for two decades and before that a decade of global hospitality work experience in operational and supervisory roles. My major publications are: 'Tourist Attractions - From Object to Narrative' (2015); 'Hidden messages' (2007); 'Ontological, Epistemological and Axiological Issues of Tourism and Hospitality Education' (2014).



言語の諸相を歴史的、政治的、社会的に考察する姿勢を養う

社会言語学・応用言語学の一分野の「言語政策・計画」、特に、様々な組織における言語政策の策定・修正・運営の過程を民族誌的なアプローチで記述することに興味を寄せています。また、言語政策の過程に影響を及ぼす歴史・政治的背景、社会に流布する言語イデオロギー、力の不均衡などに着目して、政治・社会・経済と言語（言語体系、言語意識、言語教育等）の関わりについて批判的考察を試みています。



大友 瑠璃子
OTOMO Ruriko

担当授業/
言語社会論演習

早稲田大学総合人文学科文学専攻卒業。オーストラリア国立大学で修士課程（応用言語学）修了。香港大学教育学部にて博士課程、PhDを取得。2018年10月から現職。主な業績は、'New Form of National Language Policy? The Case of the Economic Partnership Agreement (EPA) in Japan (The Asia-Pacific Education Researcher, 2016); 'Language and Migration in Japan (Routledge Handbook of Japanese Sociolinguistics, forthcoming)など。

言語社会論演習は、社会言語学に専門的に触れるきっかけを提供します。言語の社会的な機能を様々な角度から検討し、言語をシステム・体系ではなく言語実践として扱う視座を獲得することを目指します。

観光メディアが作り変える文化と伝統

ある場所が観光地になることは、単にそこを訪れる人が増加するようになるだけではありません。

例えば、日本では世界遺産は観光ブランドとして大きな影響力を有しています。しかし、登録準備から登録後までのプロセスでは、何が世界遺産にふさわしいものか、そして何がふさわしくないのかをめぐる社会的文化的な選定と駆け引きが行われます。

その結果、地域の人々が知らなかったような文化伝統が世界遺産登録のために新たに発見されたり、逆に、地域の人々にとって大切なものが世界遺産にはふさわしくないものとして除外されることもあります。観光地化とは、こうした文化や伝統の編集・演出に他ならないのです。

授業では、ある場所が観光地として個性を獲得するプロセスの背後にどのような要素があるのか、また観光地化はホストやゲストの意識や経験に及ぼす影響を与えるのみに注目し、社会学・人類学・観光学・宗教学といった諸領域の基本的な知識を身につけてゆきます。



岡本 亮輔
OKAMOTO Ryosuke

担当授業/
観光社会学演習
メディア文化と観光

1979年東京生まれ。筑波大学大学院人文社会科学部研究科修士課程修了。博士(文学)。

【著書】『聖地と俗の宗教社会学—巡礼ツーリズムが生み出す共同性』(香風社、2012、日本宗教学会賞)『聖地巡礼—世界遺産からアニメの舞台まで』(中公新書、2015)『江戸東京の聖地を歩く』(ちくま新書、2017)『宗教と社会のアプローチ—宗教社会学からみる現代社会』(共編著、勁草書房、2012)『聖地巡礼ツーリズム』(共編著、弘文堂、2012)『東アジア観光学—変遷と展望』(共編著、叢書、並記書房、2017)【その他】『現代ビジネス』
<https://gendai.smedia.jp/1st/author/ryosukeokamoto/>「ブログ・オンライン」
<https://president.jp/search/author/%E5%9B%A1%E6%9C%A0%E2%80%82%E4%B8%A0%E6%B7%B4>

Openness to New Experience

大学院での研究はただ知識を増やすためのものではありません。今までにない新しいものの見方を探求し、「自分の常識」(素朴理論)に反する考え方に真摯に向き合う姿勢を養うことで、世界に対する理解を深めてゆくものです。生成文法の誕生により人間の言語能力に関する理解は大きく進みつつあります。「(ヒトの言語能力はコミュニケーション向きに発達わけではない)」「外国語学習は開始年齢が低いほどよいわけではない」といったことが、分かってきています。人間とはどのような生き物なのかを、言語能力の研究を通して明らかにする。ロマン溢れるこの分野へ飛び込んでみたいという意欲のある学生さんの参加を期待しています。



奥 聡
OKU Satoshi

担当授業/
言語研究方法論演習

専門は理論言語学(生成文法)・言語獲得論・比較統語論。情報構造と統語構造との関係。最近では、ラベリング(句の品詞はどのように決まるのか)の観点から、日英中の比較統語研究を精力的に行っている。言語学博士(1998年: University of Connecticut)。

公共性と市民社会

公共という言葉には様々な意味がありますが、その重要な一つはcommonであること(誰にとっても無関係ではないこと)という特徴です。社会は個人に対して多くの問題をもたらす原因となる一方、個人の手に余る問題を社会全員に関わるcommonな問題として捉え直し、全員で解決策を考えるための場でもあります。「市民社会」概念の一つの重要な意義は、このように公共性を自ら実現していこうとする社会の側面を強調した点にあるでしょう。しかもそうした市民社会は、政治体制やメディア環境等の違いにもかかわらず、あらゆる社会に存在するはず。市民社会の現状と課題について、政治学・社会学・思想史などの分野を横断しながら一緒に考えましょう。



金山 準
KANEYAMA Jun
担当授業 /
市民社会論演習

東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。博士(学術)。2008年より現職。近年の研究業績として、「ブルードンの集合合理性論—自律・社会・コミュニケーション—」(『思想』第1134号、2018年)、「神の主権と人間の連合—ブルードンの連合主義論」(『政治思想研究』第16号、2016年)など。



Learn and teach using non-native spoken language.

I am an educational engineer who designs and implements online learning systems that facilitate flipped, blended, active, autonomous learning.

I offer training in 3 areas.

(1) Collect and analyze spoken language and non-verbal behavior. Research outcomes include (1.1) an online dictionary for learning Japanese pronunciation, and (1.2) a self-training method for teachers.

(2) Design and evaluate language-learning experiences. Projects include (2.1) English pronunciation through singing, and (2.2) content language integrated learning of engineering and English language.

(3) Architect and implement technologies for online learning. Systems developed include (3.1) a learner management system suited for blended learning, and (3.2) learning technologies for producing spoken or written language.

See my website <http://goh.kawai.com/> for details.



河合 剛
KAWAI Goh
担当授業 /
言語情報処理論演習

Educational background: BA linguistics (University of Tokyo), MA educational technology (International Christian University), PhD information and communication engineering (University of Tokyo).

Vocational background: Xerox PARC, SRI International, University of Tokyo.

多層言語環境化する現代社会の言語関連問題を応用言語学的な視点から考える。

交通・情報通信手段の発達により多層言語環境化する現代社会において、言語の習得が重要な課題になってきています。海外からの観光客増加で日常的に日本語以外の言葉を耳にするようになりました。少子高齢化による労働力不足を外国人によって補う動きが活発化しています。一方で、欧米では海外からの人口流入や経済のグローバル化に反対する自国第一主義の考えから、移民排斥の動きが強まっています。本授業は、応用言語学的な言語の学習・教授の方法論に注意を払いながら、第二言語習得理論の基本概念と興味の変遷について理解を深めるとともに、現代社会が抱える言語政策上の問題に言語研究の立場からどのように貢献するかが探究します。



河合 靖
KAWAI Yasushi
担当授業 /
言語習得論演習I

アラバマ大学大学院博士課程修了(Ph.D.)アラバマ大学大学院博士課程修了(Ph.D.)「学ぶ・教える・考える」ための実践的英語科教育法(共著)大修館書店 2018「成長する英語学習者」(共著)大修館書店 2010Lessons from Good Language Learners(共著)Cambridge University Press 2008

ダイナミックに融合する広報と観光を学ぶ

私は、「広報」(地域PR)と「観光」(地域マーケティング)の両分野に関わる授業を開設します。今、日本の生きる道として「地方創生」が唱えられています。その実現には、地域の魅力や価値を国内外に共感発信する広報・PR、世界から観光客を呼び込むための観光マーケティングが必須です。しかも、両者は密接に関わっており、理論や実践の面での「融合化」が急速に進んでいます。こうした潮流を取りこみ、ドキドキするほど面白い、自治体や公益団体等のパブリックセクターが実践すべき「戦略的広報」や、観光デステイネーション(目的地)で展開すべき「経験価値マーケティング」などを、是非学んでみませんか。



北村 倫夫
KITAMURA Michio
担当授業 /
パブリックセクター広報論演習
観光マーケティング論演習
情報メディアと観光
広報とマーケティング
キャリア開発演習
実践演習I(インターンシップ)
実践演習II(インターンシップ)

1981年北海道大学経済学部卒、同年野村総合研究所入社。同社では国・自治体・企業等からの受託研究調査に従事。2017年2月に退職。2007年より国際広報メディア・観光学院客員教授を経て、2017年3月より現職。専門は、観光マーケティング、公的セクター広報、地域政策(産業・観光・文化・情報分野)、公共経営、事業支援等

ポピュラー文化とメディア・観光空間をクリティカルに考える

授業では、国民国家のフレームが生み出したナショナルな視座をグローバル・ローカルに転倒・拡張させ、多様な主体による文化的関係をつうじて世界の秩序や権力のメカニズムを理解することを目指します。

①ポピュラー文化論演習では、ポピュラー文化研究の歴史と特徴、方法論について学びます。とくに文化を国家、資本、大衆を含むさまざまなアクターのまなざしと欲望、戦略が複雑に作用する空間としてとらえ、現代の文化的・産業的・社会的の感覚がナショナル・ローカル・グローバルにせめぎ合うポピュラー文化のダイナミズムについて考えます。

②メディア空間論演習では、テレビ、広告、写真、新聞、出版、雑誌、映画、インターネット、SNSなどのメディアと観光空間の関係やその相互作用のメカニズムについて学び、それが生み出す空間の再編、権力の移動、日常生活の拡張のあり方について考えます。



金成 攻
KIM Sungmin
担当授業 /
ポピュラー文化論演習
メディア空間論演習
メディア文化と観光
研究倫理と手法

ソウル大学言論情報学修士課程修了。東京大学大学院国際情報学府博士過程修了。博士(学際情報学)。著書に「K-POP 新感覚のメディア」(岩波新書、2018)、「戦後韓国と日本文化—「倭色」禁止から「韓流」まで」(岩波現代全書、2014)、「東アジア観光学—まなざし・場所・集団」(共編著、垂記書房、2017)など。

観光の現場感覚を 学び地域の観光創造に役立てる

観光は、地域の感性とその感性に共鳴する旅行者の疎通が形を作る、という考えに基づき、観光地域マネジメント論演習では多彩な観光の在り方を学び、その実践現場の感覚を知り、どんなメカニズムで観光事業が展開されるのかを考察します。多彩な地域資源を観光のコンテンツに変える方法、その提供の仕方、さらに顧客満足度アップの方策を研究、観光客受け入れのための地域づくりの手法や宿泊施設や道の駅、観光案内所、観光農園、体験施設、アミューズメントパークやスポーツアクティビティ提供施設といった観光施設運営を学び、国内観光産業のイノベーションについて、特に、人的資源の磨き上げや地域における観光協会の在り方、それぞれの地域のニーズに見合った日本版DMOの地域における役割や既存組織との関わり方の視点から研究し、地域の特性を生かしたツーリズムの創造と国内外の旅行者に対応できる観光地づくりのメカニズムを構築しましょう。



木村 宏
KIMURA Hiroshi

担当授業/
観光地域マネジメント論演習

日本大学文理学部ドイツ文学科卒業後、リゾート開発、ホテル経営会社の勤務を経て、長野県に移住、自らの宿泊施設の経営後、日本型DMOの先駆けとなる信州、いやま観光局の運営を实践。グリーンツーリズムを推進し、体験型宿泊施設の立ち上げ、温泉施設、道の駅、文化施設、郷土料理店などの公共施設運営、着地型商品の造成、観光まちづくり事業を展開。新幹線飯山駅構内の観光交流拠点整備にも関わる。また、修業事業を展開し、観光まちづくりをする長野県小布施町の老舗企業にてホテル・レストラン経営の实践。研究も行う。「価値トータル」【みちのく潮風トレイルの整備・事業化にも参画し、日本のロングトレイルの普及活動にも従事する。

The Body and Gender

The purpose of this course is to give a deep theoretical and empirical overview of gender, the body, sexuality and society, mainly in contemporary Japan. We will consider the "body" and "gender" as historical and cultural categories and ask: "What is the body?" "What is gender?" "What is sexuality?" "How does 'culture' shape the body and gender? We will explore a variety of ethnographic and theoretical materials (including readings and films) on how gender, sexuality and the body has been culturally constructed and experienced in the socio-historical context of postwar Japan. (Please note, this class is taught in English).



クック エマ
COOK Emma

担当授業/
The Body and Gender

2010年SOAS ロンドン大学社会学人類学博士。2013年北海道大学現代日本学プログラムより現職。

Tourism and Regional Revitalization

この講義では「観光」の諸相と地方創生について概観し、その着眼点や基礎概念についての理解を深める。観光の歴史における変容、文化的背景、地域に与える経済面、住民と観光客の出会いによる問題とメリット、観光と権力、持続的なまちづくりの事例などを参照しながら観光という概念を幅広く考察する。本授業は英語で行うので、レクチャースタイルよりディスカッションとロールプレーなどインタラクティブラーニングを優先する。観光論の代表的な論文と実例を紹介しながら、社会と観光の因果関係も探る。



クリーン スザンネ
KLIEN Susanne

担当授業/
Tourism and Regional Revitalization

My disciplinary background is Japanese anthropology. I have conducted ethnographic research across Japan. I have a broad range of research interests in the modern culture and society of Japan, but I categorise them into five main areas (although there is some overlap between them): 1) Immaterial culture, specifically the practice and transmission of tradition in rural areas 2) Subjective well-being and alternative lifestyles in rural contemporary Japan. 3) Regional revitalization and tourism. 4) Youth culture. I have recently started an ethnographic project about the local hip hop scene in Hokkaido. 5) Lifestyle migration: Overseas Japanese and new forms of working. More details on <https://susannekliem.net> and on the MJSF homepage.

心理学的観点から 言語学習支援(研究)を考える

大学院では、自分が明らかにしたいことについて、教えてもらうのではなく自分で見つけ出し絞り込んでいかなければなりません。自分が明らかにしたいことが既に研究されていないか、どのような先行研究があるか、自分の研究テーマが論文になるような具体的なものが、明らかにするにはどのような方法が必要かなど、自分で頭を使って考えることを学ぶ必要があります。私の研究領域は、「わかること」「できるようになること」の喜びを教育心理学的な観点から支援すること、心理学理論の立場から言語学習を考えることです。授業では、背景・目的・方法・論旨・結論が明確な教育心理学分野の論文を読むことを通じて、学術的に考える能力を養うことを目指します。



小林 由子
KOBAYASHI Yoshiko

担当授業/
日本語学習論演習

北海道大学文学研究科修士課程行動科学専攻修了。1991年より北海道大学留学生センターで日本語教育に従事。高等教育推進機構国際教育研究部日本語・国際教育部門長(教授)【主な研究業績】「日本語教育を学ぶ人のために」(2001年 世界思想社(共著))、「JFL環境における日本語学習者を対象とした内発的動機づけ研究の可能性—香港における日本のポピュラーカルチャーをきっかけとする学習者の検討から—」(『国際広報メディア観光学ジャーナル』2018年)、「日本語学習における「内発的動機づけ」の再検討」(『北海道大学国際教育研究センター紀要』2016年)など

東アジアメディア研究センター

Center for East Asian Media Studies (CEAMS)

東アジアメディア研究センターは、メディア・コミュニケーション研究院の附属組織として、2009年に設立されました。その目的は、1) 東アジアのメディアの実態を明らかにすること、2) 域内の交流の促進と発展に、メディア、コミュニケーションの視点から寄与すること、にあります。この10年間、中国大陸、韓国、台湾、香港などの大学、研究機関の研究者や、東アジアで活躍するメディア制作者、ジャーナリストを招聘してシンポジウム、講演会を開催し、交流をはかる活動をおこなってきました。センターには学術研究員が常駐し、資料の貸し出しもおこなっています。学生のみならず、ぜひ、センターの活動に参加し、その資産を活用してください。



シンポジウム「革命・民族・客家-原点から現代中国を問い直す-」(2018年12月1日)

column

メディアは政治、社会と どのように関わりうるか

メディアは「表現の自由」をはじめとする諸権利を支えにしてその社会的な役割を果たしています。このような権利に関する法律(いわゆる言論法)は、制限される危険に曝されながら長い時間をかけて制度化されてきました。授業では、講義と文献講読を組み合わせ、「表現の自由」をはじめとする諸権利が近代の民主主義国家で憲法によって保障される権利として確立される過程だけでなく、これらの権利が保障されることで成立する「公共圏」においてメディアや市民が果たしている役割について考察を進めます。法および政治の枠組みとメディアの関係から、社会について考える力を身につけていきましょう。



齋藤 拓也
SAITO Takuya

担当授業 /
メディア社会論演習
公共性とコミュニケーション
メディアリテラシー

2014年東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻博士課程終了、博士(学術)。2015年より現職。主要な研究論文として、「民主政のパラドクスとカントの共和制概念」(『社会思想史研究』第39号、2015)、「カント政治思想における『知恵』の概念——公的意志の形成をめぐる」(『政治思想研究』第16号、2016)がある。

音声学・音韻論の入門、 音声の生理機構と音声の体系的 理解を行う。

近年通信機器の発達により、新しい言語伝達形式が生まれつつあるが、音声を用いたコミュニケーションが重要な役割を担っていることに変わりはない。人間は、声帯、喉、舌、唇などを使いながら、多様な言語音を作り出し、それらを組み合わせて語や文を作り、多様な情報をやりとりしている。

生理音声学は、人間の音声がどのように作られているのか、という観点(調音位置・調音法)から分析、記述を行う分野であるが、文献的な理解だけでなく、実際にさまざまな音を出しながら、その特徴をとらえられる技能を習得することも重要である。

音声学的な分析によって得られた現象を音韻論的に理論化する過程も扱う。音素の抽出から、音節、モーラ、フットなど言語音の中の独特な構造とそれぞれのレベルで生じる現象を形式的にどのようにとらえるかについて日本語や英語などの身近な言語の具体的な例をあげて検討する。



坂間 博
SAKAMA Hiroshi

担当授業 /
言語習得論演習Ⅱ

上智大学大学院外国語学研究所博士課程。
「チャットシステムを利用した初習外国語指導—インタラクションのあるドイツ語表現演習のケーススタディ」、『インタラクションのあるCALL授業』国際広報メディア研究科・言語文化部研究報告叢書59、北海道大学、pp.57-96、2005年3月



政治経済制度の起源を探る

私たちの生活に様々な形で影響を与える政策や制度はどのようにして形成され、発展してきたのか。私の研究の主な目的は、政策や制度の起源と発展過程を探ることにあります。これまでの研究では、日本の産業政策や農業政策が、いつ、誰の手によって、どのような意図に基づいて形成されたのかといった点を検証し、さらにそれらの分野における政策や制度が長い期間にわたって維持されてきたメカニズムを分析してきました。そしてこうした研究においては、政策立案に携わった人々の間で、政策立案の指針となる特定のアイデアが生み出され、それが多くの人々の間に波及していくことで、政策転換や新しい制度構築が起きていく過程を明らかにすることを目指してきました。現在は、戦後日本の農業政策と農協制度が構築された歴史的背景に注目して研究を進めています。



佐々田 博教
SASADA Hironori

担当授業 /
East Asian Political
Economy

ワシントン大学大学院政治学研究所修士 Ph.D.(政治学)。専門は日本政治と東アジア政治経済。著書『農業保護政策の起源：近代日本農政の発展 1874-1945』(助草書房、2018年)『The Evolution of the Japanese Developmental State: Institutions Locked-in by Ideas』(Routledge、2012)『制度発展と政策アイデア：満州国・戦時日本・戦後日本にみる開発型国家システムの展開』(木鐸社、2011年)

メディアと政治、経済、社会との 相互関係に着目

中国では、「デジタル中国」、「スマート社会」、「ビッグデータ戦略」を国全体の発展戦略として次々と打ち出し、メディア環境は激変している。とはいえ、社会変革の進展について分析考察する上で、その前段階の考察が重要であるという観点から、授業では、「改革・開放」期のメディアの変容を歴史的、社会的文脈に位置づけ、メディアが果たす役割を政治、経済、社会とのインタラクティブな関係から考察し、分析する方法について検討して行く。合わせて日本のメディアの経験にも触れ、比較の視点から、複雑な社会関係に組み込まれているメディア構造と機能を検討し、問題意識を高めて行きたい。



西 茹
XI Ru

担当授業 /
中国メディア論演習

1986年、瀋陽師範学院中国語文学系卒。遼寧省『新思维』編輯者を経て、北海道大学大学院国際広報メディア研究科博士課程修了、博士。著書に『中国の経済体制改革とメディア』(集文舎・中国書店)、『新聞ジャーナリズム論—リップマンの視点から中国報道を語る』(桜美林大学北東アジア総合研究所、共著)等。

旅と人間について思索する

担当する演習は「共創文化論」と「観光メディア思想論」。聞き慣れない科目名かもしれませんが、「共創」とは Hannah Arendt の語を借りれば人間の複数性という条件に根ざす営みであり、また後者は、旅をめぐる人類の思索の跡に総体として斬りこむ知の冒険——とは少々カッコつけ過ぎですが、思い切ってこれらを看板に掲げることにしました。元来は中国・台湾をフィールドとした比較文学+社会文化史+メディア文化論の研究から出発しており、基本的に「歴史性」が根幹をなします。広義の《移動》やそれに必然的に随伴する《偶有性》の視点から、中国社会や中国文化を捉え返し、そこに底流する思想文化のダイナミズムを考察すること。不亦説乎!



清水 賢一郎
SHIMIZU Kenichiro

担当授業 /
共創文化論演習
観光メディア思想論演習
メディア文化と観光
情報メディアと観光

東京大学大学院博士課程修了(中国語・中国文学専修)。最近の論文に、「近代中国におけるマストゥーリズムの黎明——俟徳儲蓄会を中心として」(『越境する中国文学——新たな冒険を求めて』、東方書店、2018)。「主たる訳書に、朱天心『古都』(国書刊行会、2000)、孫歌『竹内好という問い』(岩波書店、2005)等。

フィールドからエコツーリズムの視点で地域創造の意味を問い直す

「エコツーリズム論演習」では、地域の環境保全、観光開発、活性化を目的とする地域開発の手段としてエコツーリズムを捉え、エコツアー、エコビレッジ、フットパスといった歩く滞在型観光を事例として座学とフィールド実習を交えた授業を行い、サステナブルツーリズムが地域創造に果たす役割を考察します。「地域創造論演習」では、自然災害や人為災害の発生に備える事前復興の観点から、自然資源や文化遺産を巡るコンフリクトと合意形成、環境アセスメントの手法と制度について理解を深め、フェノロジーカレンダーと宝マップを用いた地域資源の文化遺産化を検討することにより、復興ツーリズムによる地域創造のあり方を考究します。



下休場 千秋
SHIMOYASUBA Chiaki

担当授業/
エコツーリズム論演習
地域創造論演習

筑波大学大学院環境科学研究科修了。博士(芸術文化学)。1987年から大阪芸術大学においてエコロジカルプランニング、アフリカの民族文化に関する教育と研究に従事し、2016年より現職。日本エコツーリズム協会理事。著書に「民族文化の環境デザイン」(単著、2005年)、「エコツーリズムと持続可能な開発 案図はだれのもの?」(共訳、2016年)など。

Search Strategies, Resource Organization, Management & Sustainability

In my classes, the multilingual aspect is key. It is very refreshing when different students engage with primary and secondary sources in Japanese, English, Chinese, Korean, etc. Both Japanese and non-Japanese students are warmly invited to participate in my courses. I tend to organize my classes in a very open, nonhierarchical way. Learning should be a fun and gratifying experience!



シルツ ミヒヤエル
SCHILTZ Michael

担当授業/
Search Strategies,
Resource Organization,
Management & Sustainability

Ph.D. from the University of Leuven, Belgium, Recipient of a European Research Council Starting Grant, Associate professor: University of Tokyo, 2011-2016; Graduate Institute, Geneva (2016-2018). Being a financial historian, I am mostly fascinated by the ways in which money and finance have made modern society tick, especially since the "first globalization" (1870-1914), a period that coincides with the proliferation of the gold standard on a global scale.

サービス産業では、クチコミマネジメントに注目すべき

サービス品質は、経験品質の属性が強く現れるため、直接経験してみる前にその品質を評価することができない。そのため、サービス利用前の段階で情報を収集する際、顧客は主に同サービスを直接経験したことのある既存顧客からのクチコミに依存する傾向が強い。これは企業からの宣伝広告よりも信頼されるとも言われる。このように、クチコミをマネジメントすることはサービス企業にとって大変重要な課題である。

従って本授業では、まずサービス及びサービス産業に対する全般的な知識や、サービス品質の測定方法について学ぶ。また、品質管理手法である品質コストの概念を学習することで、サービス産業における機会損失の重要性を確認する。さらに、機会損失の中でクチコミによる損失を取り上げ、その影響力を確認するとともに、望ましいマネジメント方法について学習する。



張 燾赫
JANG Juhyeok

担当授業/
サービス産業広報論演習
社会調査法II

延世大学(韓国・ソウル)情報産業工学科・経営学科二重専攻卒、一橋大学大学院商学研究科博士後期課程修了。博士(商学)。一橋大学大学院商学研究科特任助教を経て現職。サービス品質管理を中心に、宿泊業を中心としたサービス業における品質コストマネジメントの新たな枠組みの提案、サービス顧客の離反行動や悪い口コミ行動から発生する機会損失の定量化、口コミマネジメント等の研究に従事。

コミュニケーション研究とその研究方法を学ぶ

「言語コミュニケーション論演習」では、人間の活動の多くの側面に関わるコミュニケーション研究の概要を主要な課題(言語と非言語、対人、メディア、異文化、組織等のコミュニケーション)に沿って学びます。また、これら課題に関する最近の論文を読んで、近年の研究動向とコミュニケーション研究の(量的な方法を中心とする)主要な研究方法についても理解を深めます。「社会調査法II(定量・データマイニング)」では、他の教員と分担し、人間とその行動を対象とする社会科学的な研究を行う際に採用される量的研究方法およびデータ分析の基礎を学びます。



鈴木 志のぶ
SUZUKI Shinobu

担当授業/
言語コミュニケーション論演習
社会調査法II

ミネソタ大学大学院コミュニケーション学研究科博士課程修了(Ph.D.)。主な研究テーマは異文化・対人コミュニケーション。論文「議論構造の韓国・日本・米国の比較」(『異文化コミュニケーション』2018)、「Culture change in organizational public discourse 1998-2008: Examining annual reports of Japanese and US corporations (International Journal of Intercultural Relations, 2013)他。

公共社会の観察を観察する

現代を「二次観察(観察の観察)」の時代とする社会学理論がありますが、現代社会を捉えるには、対象そのものの観察(一次観察)のみならず、人々が行動指針として対象をどのように観察しているかを観察(二次観察)する必要があります。このような意識のもと、現代公共社会の特性を、公共圏論、意思決定論、社会システム論、メディア論等多角的視点から考察し、その観察の方法論を、学生の皆さんそれぞれの研究領域に接続するのが授業の目的です。マクロとミクロの視点、メタとオブジェクトの視点、理論と実践を往還しつつ、独自の観察を作り上げていく楽しさを、一緒に味わっていきましょう。



鈴木 純一
SUZUKI Junichi

担当授業/
公共社会論演習

東京大学大学院人文科学研究科修了。ドイツ・マンハイム大学留学。現在は、ハーバード大学の社会的コミュニケーション論、ルーマンの社会システム論、認知メタファー論を理論的な柱にして、公共圏・メディア・移動交流に関する観察・記述・分析の方法論を研究。論文は「社会学論における観察概念から見たメタファーの機能」等。

国際交流の社会的・歴史的意義を考える

国境を越える人やモノの交流は、歴史上、様々な姿、形、場所で行われてきました。歴史的経験が教えてくれるように、「交流」はそれが行われている国・地域社会の特質や差異を認識させ/つくるとともに当該社会を変化させる契機やきっかけになります。人々の国際交流は社会変動・変革と密接に関わる活動、現象であり、知識社会の進展の中で、その重要性はますます高まっています。授業では、主に現代の教育における国際交流の諸事象を取り上げ、その社会的・歴史的意義を考察します。国際交流にかかると読み解くことを通して、自らの思考を実社会の中で展開させるための基礎力を養いましょう。



高橋 彩
TAKAHASHI Aya

担当授業/
国際交流論演習

ロンドン大学イイロイ・ホルウェイ校に学びPh.D.取得。教育・研究、留学生支援、プログラムの企画・運営等、学術・実践の両面で国際教育交流に携わってきた。Aya Takahashi, The Development of the Japanese Nursing Profession: Adopting and Adapting Western Influences (RoutledgeCurzon, 2004)ほか。

自分の研究テーマに
閉じこもることなく、
広く多くの文献に触れよう

学生の皆さんには自分の狭い研究テーマに閉じこもることなく、広く多くの本や論文に触れてもらいたいと思っています。テーマ周辺の文献だけ読み、アンケート等の調査をすれば修士論文は書いてしまうかもしれません。しかしそれでは研究はそれ以上発展し得ないでしょう。私の授業は比較文化論演習です。ある国や地域を研究する場合、その国や地域だけを研究していたのでは見えてこない、その国や地域の特殊性が、比較の視座を用いることで見えてきます。皆さんの研究もこれにちょっと似ているかもしれません。研究分野の基礎文献はもちろん、広く多くの文献を読破してください。



竹中 のぞみ
TAKENAKA Nozomi
担当授業 /
比較文化論演習

ポルドー第三大大学院博士課程修了(フランス文学比較文学第
三期課程博士)。主要著書『フラン
ソワ・モーリヤック論 犠牲とコ
ミュニオン』(1996、北海道大
学刊行会)、エミール・ゾラ『バ
リ』(2010、白水社)

現代社会のなかの過去と活用
—ヘリテージと観光の関係

現代社会において、過去がどのように扱われているか、取捨選択されているか、いかに「ヘリテージ(遺産)」が創造されていくのか。ヘリテージ・スタディーズは、欧米を中心に顕著な発展をみせています。本授業では、考古学、文化人類学、社会学、歴史学、政治学、様々な学問分野においてとり扱われるヘリテージの議論をとらえたうえで、観光とヘリテージの関係に焦点を当て、文献と事例研究から検討します。ヘリテージの創造と、その観光活用の背景や過程は地域や国によって大きく違ってきます。また、ユネスコを中心とした国際社会による文化遺産国際協力活動は、観光とヘリテージの関係にも強い影響を与えてきました。授業では、ヘリテージと観光が抱える課題を事例研究を通して明らかにし、学際的視野をもって検討します。



田代 亜紀子
TASHIRO Akiko
担当授業 /
文化遺産国際協力論演習

上智大学大学院外国語学研究所
地域研究専攻博士課程修了。博
士(地域研究)。2006年から(独)
東京文化財研究所、2010年から
(独)奈良文化財研究所において、
文化遺産国際協力業務に従事。文
化遺産保存政策と地域社会をテ
ーマに主にインドネシア、カン
ボジア、タイにおいてフィールド
ワークをおこなう。主な著作に「ア
ンコール・ワットを読む」(共著、連
合出版、2005年)「グローバル/
ローカル 文化遺産」(共著、上智
大学出版、2010年)などがある。

メディア・ツーリズム研究センター

Center for Media and Tourism Studies (CMATS)

現在、ICTの高度化、メディアの多様化に伴い、電子メディア空間と現実空間の交錯、コミュニケーション様式の変容、大衆文化を中心とした文化の越境と受容等の現象が急速に進展している。同時に、国際的な観光交流人口の爆発的増大、人のモビリティの高まりは、そうした混濁状況の進展を、具体的な場所に結びつけながら加速させている。本センターは、メディア研究とツーリズム研究の架橋・横断・融合のための共同研究を支援・推進するハブとして、現在進行中の新たなツーリズムや文化的諸実践の解明を目指し、コンテンツ・ツーリズム研究、拡張現実(AR)ツーリズム研究、東アジア観光文化研究、平和観光研究など、コアとなる先駆的研究テーマを設定し、既存の学問領域の枠を超えた共同研究を行っている。

column



国際シンポジウム「平和観光研究の可能性」(2017年12月)

ICTとともにあるほかない
「わたし」のサバイバル

テオ・ヤンセンは、「いきもの」を「自律的に行動し、遺伝し、進化するもの」であると定義し、プラスチック・チューブの「いきもの」を創り出した。私たちは意識するとしなやかに関わらず、「自分の口出し可能な世界」を区切って生きている。「もの」と「いきもの」・「わたし」と「あなた」・「じぶん」と「せかい」の境界を自明で絶対的なものと捉える限り、「いきもの」を創るという実験は「精妙な自然のグロテスクな模倣」でしかない。だが、コンピュータ、特にインターネット技術の進化は、脳の外部化、知のネットワーク化を促進し、境界線は自明のものでなくなりつつある。文化は遺伝するか、また、進化するか。愛は編集・保存・複写できるか。情報通信技術は、私たちの何を、どう変えようとしているのかを、具体的なコンテンツやサービスを通して検討する。自分の専門とマッチングをとることに腐心するよりは、なるべく多くの方向にアンテナを伸ばされることを期待している。



田邊 鉄
TANABE Tetsu
担当授業 /
マルチメディア表現論演習

大阪外国語大学大学院外国語学
研究科修士課程修了。2008
「RPG型中国語グループ学習シ
ステム」2009「中国語ローマ字
習得プログラム『カナ☆ピン』」・2
010「人工無能小季4号」(以上電
子学習システム等)、2001「電脳
中国学III(漢字文献情報処理研
究会編・好文出版)

対照言語学の視点から、
日本語を見つめ直す

複数の言語を比べることで見えてくるものがあります。たとえば、韓国語は日本語と同じ漢字文化圏で膠着語という共通点があり、言語的類似性が強調されることが多いのですが、音声からコミュニケーションスタイルまで両言語を幅広く比べて考察すると色々な相違点が見えてきます。日本語と、皆さんがこれまで母語または学習言語として接してきた他言語を、音声・音韻、語彙、文法、文構造、談話、言語行動などのさまざまな側面から対照、議論してみましよう。その中で、日本語の普遍性と特殊性を理解し、対照言語学の研究法のバリエーションを知ること、言語研究の土台となる分析力を養うことができると考えます。



鄭 恵先
JUNG Hyeseon
担当授業 /
比較日本語論演習

大阪府立大学大学院人間文化学
専攻博士後期課程修了(Ph.D.)。学
位取得論文の題目は「日本語人
称詞の社会言語学的研究」。ほか
に、日韓対照後設研究、メディア
言語研究に取り組んでいる。主要
業績は、「後設語研究の展開」(共
著 くらしお出版 2011)、「後設語
研究の地平」(共著 くらしお出版
2007)など

組織コミュニケーションのあり方とは？

担当授業(組織コミュニケーション論)では、組織コミュニケーションの本質的テーマと考えられる「組織学習論」の概念とその応用を検討していきましょう。「組織コミュニケーションとは、<組織を構成する個人の目標イメージと、組織自体の目標イメージを一致させるための一連のコミュニケーション活動である>と理解して、組織を構成する諸要素の有機的な連携のもとに機能することまで理解できれば、最強の組織を設計・運営できることを実感できるでしょう。理論と実践、それぞれの学びを通じて組織のあり方を見ていきましょう。



辻本 篤
TSUJIMOTO Atsushi

担当授業/
組織コミュニケーション論

1972年三重県生まれ。2006年 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得退学、東京大学大学院情報学環助手、助教、特任研究員等を経て2013年4月より現職。著書に「組織学習の理論と実践」生産性出版、2014年(単著)、CREATIVE MARKETING FOR NEW PRODUCT AND NEW BUSINESS DEVELOPMENT, World Scientific Publishing Co.,Pte.Ltd, Aug. 2008. (共編著)、Corporate Strategies for Dramatic Productivity Surge, World Scientific Publishing Co.,Pte., Ltd., June, 2013. (共著)、Uncertainty and Catastrophe Management, Imperial college Press. (共編著)など。

あたりまえを疑う

ろう(者)について聴者が抱いているイメージは自然(当然)なものではなく、構築されたものである。この授業では、言語としての手話、言語的少数者としてのろう者という視点から、聴者が当然視している価値観を相対化し、批判的に見るきっかけを提供する。

さらに、障害学(disability studies)という新しい研究分野がもたらした障害(者)に対する視点の変化を手話、ろうという視点と結びつけながら考える。



土永 孝
TSUCHINAGA Takashi

担当授業/
マイノリティ論演習

北海道大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。酪農学園講師を経て現職。「手話をめぐる問題圏と大学英語教員」北海道大学英語英米文学研究会 The Northern Review 第30号(2002)pp. 35-4「手話・ろうの異化作用：今、なぜ、「聴くこと」なのか？」清水賢一郎、西村龍一編「聴くことの時代」国際広報メディア研究科・言語文化部研究報告集書54 (2003)pp. 195-217

言葉から見えてくる社会

私たちがコミュニケーションの手段として使っている言葉には、個々の考えや情報だけではなく、社会の様相も表れます。私の研究では、批判的談話分析という理論を用い、新聞などのメディアで使われている言葉の分析を通して、ジェンダーに関する問題を考察してきました。あからさまな性差別表現が公の場であまり使われなくなってきたても、「男らしさ」や「女らしさ」といったジェンダーのイメージが作られていく過程では、言葉が重要な役割を果たしています。ジェンダー以外にも差別意識や様々な価値観の形成には、言葉という側面を考えないわけにはいきません。授業では言説分析や談話分析と呼ばれる分野を概観しつつ、言葉と社会の関係を深く考えていきます。



富成 絢子
TOMINARI Ayako

担当授業/
言説分析論演習
メディアリテラシー

英国ランカスター大学で博士号(言語学)を取得。研究テーマは言語とジェンダー、批判的談話分析。「ディスコース分析の実践」(共著、くろしお出版 2016)、「震災と原発事故の新聞記事における子供の描写とジェンダーの関係」(大みか英語英文学研究 (18)、2014)など。

環境と共生を通して「今」を考えよう

現代においては、産業活動のみならずどのような活動においても、自然環境への配慮が欠かせないものになっています。私の研究では、このような環境との共生の問題を、近代化論やリスク社会論、科学社会論から理論枠組みを援用しつつ、理論と現実の両面から考察してきました。環境問題は、私たちの外にあるのではなく、社会のしくみや価値観と深く結びついています。授業では、将来皆さんが、具体的な問題に遭遇した時支えになるように、いくつかの理論的視座を紹介し、過去や現在の具体的な環境事例について、各ステークホルダーの役割や相互のコミュニケーションに注目した、情報収集と発信の方法について、議論を深めます。



長島 美織
NAGASHIMA Miori

担当授業/
環境社会論演習

マサチューセッツ工科大学大学院言語・哲学研究科博士課程修了。Ph.D.。研究テーマは、リスク、環境、社会の変容。著書に「拡散するリスクの政治性」(萌書房、2015)。主な論文に「Risk Communication and the Disposal of Radioactive Debris: Answering Questions without Questioning Answers」(Social Science Japan Journal, 2017)

移動・混交・パフォーマンス

「観光者であることは近代的であることの決定的な特徴のひとつだ」とJ・アーリが言うとおり、空間を移動し観光することは私たちの社会の中ではもはや日常化した慣習となっている。たとえ私たち自身が移動しなくても、社会そのものの流動性が症候群的に高まっているため、私たちはいやおうなく観光という社会的流砂に巻き込まれてしまう。こうした状況で、社会文化的存在としての私たちは何あるいは誰とどのように混交し、新たにどのような環境や関係を構築し、そこでどのように振る舞うのかといった問いについて、モノ・場所・経験の真正化論や観光パフォーマンス論などの視点から、皆さんと一緒に考えていきたい。



西川 克之
NISHIKAWA Katsuyuki

担当授業/
観光文化論演習

北海道大学大学院文学研究科修士課程修了。専門領域は観光社会文化論、近代イギリス研究。論文として「余暇と祝祭性：近代イギリスにおける大衆の余暇活動と社会統制」(「観光創造研究」第6巻、2009)、「イメージの呪縛を解くために：美瑛における「観光のまなざし」の向こう側」(「CATS 叢書」第11巻、2017)など。



認識—表現の根底にあるメディア

私たちがものごとを認識し、認識したことを表現する、そこには必ず何らかのメディアの働きがあります。もっとも根源的なメディアである言語。あるいは外界を知覚するメディアとしての視覚や聴覚。19世紀の写真や映画、20世紀の電話、TV、コンピュータ、インターネット等のメディア技術の革新は、したがって認識—表現そのものの条件を大きく変えてきました。この変化への鋭敏な「問題意識」を共有する文化や思想を、私は現代メディア文化でありその研究であると考えています。それはたんにアニメやネットといった「現代」的な文化現象に限定されるものではありません。すべての認識—表現のメディアは、たがいに深くジャングルのように絡み合っているからです。このジャングルでの道の見つけ方、それが私の授業や研究が目指すものです。



西村 龍一
NISHIMURA Ryuichi
担当授業 /
現代メディア文化論演習
研究倫理と手法
メディアと表象

東京大学人文科学研究科独語独文学修士。主要な論文に「呼びかけと応答」—日系カナダ人アーティスト、シンディ・モチズキの「アート・アニメーションにおける「記憶」の表現」(共著)、「情報の「人形」の形而上学——押井守の「ゴースト」連作について」「知覚複製メディアとアウラへの意識」「電話の声とアイデンティティ——ねじまき鳥クロニクル」あるいは「メディア時代の文学」等がある。



遺産創造を通して デスティネーション・マネジメントを 考える

前期の授業では、観光創造を支える社会や地域の課題解決のための実践理論である「観光デザイン」について、特にまちづくりや文化資源マネジメント、国際協力の視点から学びます。具体的には、文化財保護や都市計画等の法制度、景観マネジメント、官民協働(PPP)とCBT=community based tourism、国際協力プロジェクト等について解説・議論します。後期は、ユネスコ世界遺産条約の将来戦略の学習を通して、遺産を価値説明する論理やマネジメント計画の枠組みを理解した上で、学生個々が遺産創造(=潜在する遺産価値の再発見と未来の遺産の創出)の発想力を得るために、自ら身近にある遺産を見出し、その価値づけ、マネジメントの現状分析と計画を個別プロジェクトとして提案します。



西山 徳明
NISHIYAMA Noriaki
担当授業 /
地域と観光
観光デザイン論演習
世界遺産マネジメント論演習

京都大学工学研究科博士課程単位取得退学。博士(工学)。専門は建築・都市計画学、ツーリズム、文化遺産マネジメント。文化庁文化審議会/歴史文化基本構想検討会、国交省国土審議会北海道開発分科会、札幌市/白川村景観審議会会長、北海道景観審議会委員。フィジー、イラン、ペルーなどで観光開発国際協力を展開中。

移住が生み出す 多重的な生活・文化的空間

この授業では、多文化共生の実態や、多文化共生を各地域、各時代において国家がどのように管理していたのかを学ぶ。帝国から国民国家へ、また国民国家から多民族国家への歴史的な経緯を追いながら検討する。国境線と民族、民族の強制移動(deportation)や帰国政策(repatriation)についても学習する。この授業の目標は、1)多民族・多文化社会に関する理解を深める、2)国家の多民族政策の在り方やその歴史的な変遷の分析をとおして現代社会を考察する力を身につけることである。第1回と第2回はイントロダクションとして講義を行い、第3回以降は学生が提示する文献を読み、ディスカッションを行う。



パイチャゼ スヴェトラナ
PAICHADZE Svetlana
担当授業 /
多文化共生論演習

北海道大学国際広報メディア研究科博士課程修了。博士(国際広報メディア)。研究テーマは移民の教育、アイデンティティと言語・多文化共生。共編にVoices from the shifting Russo-Japanese border: Karafuto/Sakhalin (Routledge, 2015)。共著に「サハリン残留」-日韓口百年にわたる家族の物語- (高文英, 2016年)など。

多様性はどのように 管理されているか

現代社会の課題の一つに、多様性管理の問題がある。狭義のそれは、男女や人種の雇用均等、障害を持つ人へのリズナブルな支援、LGBTの権利認定等を指すだろう。しかしここでは更に、社会言語文化的側面にも光を当て、現代社会における多言語多文化性のマネジメントというテーマを設定したい。切り口として、国家、地域、歴史的少数者、移民、外国人、言語教育、メディア、歴史認識、変化、最新動向といった観点を使い、同時に日本研究、中国などの東アジア研究、そしてヨーロッパ統合の進展と停滞挫折に強い関心を向ける。いずれも地域文化と超国家的普遍性のあり方を探る作業となる。映像資料を多数活用する。自分の研究との接点を探すつもりで気楽に参加してほしい。



橋本 聡
HASHIMOTO Satoshi
担当授業 /
公共文化論演習

1987年学習院大学大学院人文科学研究科博士後期課程中退。同年から本学勤務。冷戦終結前のプラハ、直後のウィーンでドイツ語史、チェコ語を学んだ。中欧言語文化論に加え、超国家的価値と地域文化の連動性に関心を寄せる。編著に「言語と社会の多様性」(メディア・コミュニケーション研究院叢書、2008年)など。

エスニシティとメディア文化の 関わりを考える

人が「他者」との差異を認識する時、そこにエスニックな集団の線引きが生じます。日々再生産される差異の意識を支えるのは広義のメディア文化であると考えれば、エスニシティとメディア文化の関わりは切っても切れないものであると言えるでしょう。私の授業では、「エスニシティ」「ナショナリズム」「レイシズム(人種主義)」などの概念について基礎的な理解を身につけた後、ヨーロッパ、アメリカ、アジアなどの事例研究を受講者の関心に合わせて選んだ上で講読し、活発なディスカッションを通して現代社会のエスニシティとメディア文化をめぐる諸問題について受講生と一緒に考えていきます。



浜井 祐三子
HAMAI Yumiko
担当授業 /
エスニック文化社会論

東京大学大学院総合文化研究科博士課程中退。専門はイギリス現代史・地域研究で、特に第二次世界大戦後のイギリスへの入移民と社会およびメディアとの関わりに関心を持つ。主編著に「イギリスにおけるマイノリティの表象〜「人種」・多文化主義とメディア」(2004)、「想起と忘却のかたち〜記憶のメディア文化研究」(2017)。

「ジェンダー」の視点で 社会・文化の成り立ちを考える

ジェンダー区分は、社会における女性／男性(そして2つのカテゴリーでは語れない存在)の「見方」の枠組みを構成することにより、私たちの生活のあらゆる側面に関わっています。そうした見方に大きな役割を果たしているのがメディアです。授業では、メディアにおける女性・男性表象を扱う論文を読みながら、ステレオタイプ形成の問題点や、個人のアイデンティティや社会の価値観に及ぼす影響について考えていきたいと思います。女性に限らず、マイノリティ、男性、社会の在り方／表象のされ方を問う姿勢を、ジェンダーの視点を通じて学んでいきましょう。地域研究への応用として、ニュージーランドの女性史・文化史を取り上げることもあります。



原田 真見
HARADA Mami

担当授業/
ジェンダー社会文化論演習

東京大学大学院総合文化研究科
地域文化研究専攻博士課程単位
取得満期退学。「メディアと女性—
1960年代ニュージーランドの「揺
れる」女性像—」(『歴史学研究』、
2004年)「ニュージーランド女性
の国際意識と帝国—二十世紀の
幕開けから両大戦間期まで」(『帝
国の長い影』、ミネルヴァ書房、
2010年)等

〈境界〉論からのアプローチ

中心からすると内部と外部の相対する政治的空間の最前線である〈境界〉は、周辺からすれば政治関係を通り越してヒト・モノ・文化が交流するコンタクト・ゾーンでもあります。〈境界〉は本来的にせめぎ合う両義的な争闘の場なのです。

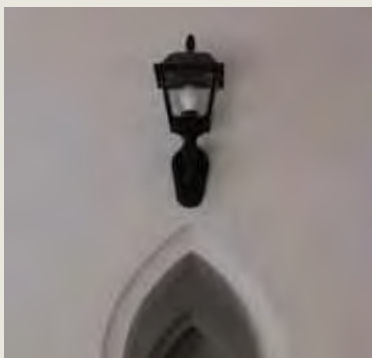
〈境界〉の構築や変動によってその様相を大きく変貌させる人の移動、文化、思想のトランスナショナルな展開から、越境という政治的・社会的・文化的思考の可能性を模索することができます。こうしたアプローチをとおして、これまで自明とされてきた集団や属性の全体性・同質性を批判的に問い直し、内部と外部、集団と個人、中心と周辺をめぐる文化的ヘゲモニーの政治的意味を多面的に捉えます。



玄 武岩
HYUN Mooam

担当授業/
文化越境論演習

東京大学大学院人文社会系研究
科博士課程修了。著書に『韓国の
デジタル・デモクラシー』
(2005)、『統一コリア』(2007)、
『コリアン・ネットワーク』(2013)、
『「反日」と「嫌韓」の同時代史』
(2016)、共著に『大日本・満州帝
国の遺産』(2010)、『サハリン残
留』(2016)、編著に『越境するメ
ディアと東アジア』(2015)など。



相互行為場面からみることばの姿

授業では、日本語母語話者の様々な相互行為をビデオ撮影したデータを用いて、ことばおよびコミュニケーションの分析を行います。ことばの「自然な生息環境」である実際のやりとりでは、参加者の身体動作、空間的位置、周囲の環境など多くの情報とことばとが相互作用しながらコミュニケーションが進んでいきます。しかし、注意の容量に制限があるヒトは、すべての情報を同時に扱うことはできず、そのことが、ことばの設計に大きな影響を与えています。相互行為場面を詳細に観察することで、今私たちが交わしている1つ1つのやりとりがことばを形作っていることが実感できると思います。話を止めて今発したことばの背後に注意を向けてみましょう!



平田 末季
HIRATA Miki

担当授業/
言語応用論演習

2015年博士(国際広報メ
ディア)。研究分野は語用論、認知言語
学、相互行為の言語学。『インタラ
クションと学習』(第5章、共著)、
「注意概念を用いたソ系の直示用法
と非直示用法の統一的分析」
([言語研究]146、単著)、[共同
注意確立過程における話し手による
指示詞の質的素性の選択]([語
用論研究]18、単著)など。

Practical knowledge to work in international business

国際経営組織論は、国際的なビジネス環境で働くことを考えている学生のための実用的な知識を提供する。特に、現在の日本企業経営に対する深い理解を学生に与えることを目的とする。授業の方法は、議論、プレゼンテーション、ケーススタディおよびグループ作業を通して、学生自らの積極的な参加を強調する。



フィルコラ ピーター
FIRKOLA Peter

担当授業/
国際経営論演習II (組織)
International Management
Trends

高等教育推進機構国際教育研究
部で北海道大学短期留学プログ
ラム(HUSTEP)の担当教員。北海
道大学大学院経済学研究科経営
学博士。カナダのマクマスター大
学MBA。カナダ出身。研究テーマ
はキャリア・ディベロップメントと人
的資源管理の国際比較。

フィールドから考えるメディアと社会

近年、グローバル化やITの発達により人間と社会の場面にメディアの影響がますます強まっており、世界上で電子メディアの影響を受けずに暮らすことのできる地域はごく限られています。そこで、人の暮らす場面においてメディアがどのように影響しているのか、また、メディアに人々の生活がどう影響するのかを、エスノグラフィを通じた現地のミクロな人間関係からマクロな社会動向までを往還する視点から考えます。

一方で社会にとってメディアとは何なのでしょう? 人類学の従来の議論にはこうした人とメディアの関係について考える上で重要な問題に対するヒントが多く含まれています。宗教や社会構造、エスニシティ、モノ、医療・身体といった、これまでの人類学の議論を振り返ることで再検討します。



藤野 陽平
FUJINO Yohei

担当授業/
メディア人類学演習

慶応義塾大学大学院社会学研究
科博士課程単位取得退学。博士
(社会学)。日本学術振興会特別研
究員(PD)、東京外国語大学アジ
ア・アフリカ言語文化研究所研究
機関研究員を経て、現職。著書に
『台湾における民衆キリスト教の
人類学—社会的文脈と癒しの
実践』(2013年風響社)など。



「芸術」から社会を考える

私は、ゴヤの作品を中心として、スペイン近代美術を研究しています。ゴヤは18世紀末から19世紀へと、西欧における大きな思想的・文化的転換期に制作を行っていました。その作品を、当時の社会的文脈のなかで捉えることを目的として研究を行なっています。特に最近では、ゴヤが描いた戦争の様子や民衆のイメージを対象としています。

授業では、受講生の関心に合わせて、美術のみならずポップカルチャー等も含めて、文化現象を広く扱っています。受講生には、映画やアニメ等、自分が興味を持った作品が、現代社会においてどのように生産・消費されるのか、どのような意味を伝えるのかを批判的に考察する力を身につけて欲しいと考えています。



増田 哲子
MASUDA Noriko

担当授業 /
芸術社会論演習
メディア文化と表象
国際交流と地域文化

筑波大学大学院博士課程人文社会科学研究科修了。博士(文学)。「スペイン独立戦争の記憶と表象ーゴヤ(1808年5月2日)と(5月3日)を中心に」(浜井祐三子編著「想起と忘却のかたち: 記憶のメディア文化研究」三元社、2017年)、「ゴヤの『わが子を食べるサトルヌス』における『食べること』のイメージ」(『美学』239号、2011年)等。

共に創り上げる言語文化

背景の様々な人々との異文化間コミュニケーションには、言語運用力の他に文化、アイデンティティ、力関係、覇権主義などの非言語的要素も関係しています。またそのようなコミュニケーションの空間では、言語や文化は固定できるものではなく、母語話者、非母語話者の別を問わずその空間への参加者すべてが相互に働きかけ、共に創り上げていく動的なものです。その例として「English as a Lingua Franca (ELF)」や「やさしい日本語」が挙げられ、社会の国際化が進むにつれて発達してきた比較的新しい言語の概念です。

「異文化間コミュニケーション論演習」では上記のようなテーマを探究します。国際交流科目と合同開講で、色々な国からの交換留学生も受講します。ELFの実践の場として授業は英語で行い、討論が多く含まれます。



山田 悦子
YAMADA Etsuko

担当授業 /
異文化間コミュニケーション論演習
University of Durham(UK), PhD(教育学)取得。-(2012) Developing Criticality in Practice through Foreign Language Education(Peter Lang) S. Houghtonとの共著、-(2015)相互文化的能力を育む外国語教育ーグローバル時代の市民性形成をめざして(大修館書店) 細川英雄監修、古村由美子との共同翻訳:(原著)Byram, M. (2008) From Foreign Language Education to Education for Intercultural Citizenship(Multilingual Matters)

Local Politics and Tourism

This class will examine how local governments are engaging in border tourism for the purpose of economic revitalization. Border tourism usually involves visiting a borderland and then crossing the border to enter another country. In Japan, the leading practitioners of border tourism have organised various tours including those between Hokkaido and Sakhalin, and Tsushima and Busan. This class will examine the successes and difficulties of these tours and question the meaning of this kind of tourism.



ブル ジョナサン エドワード
BULL Jonathan Edward

担当授業 /
Local Politics and Tourism

After doing my Undergraduate and Masters degrees in the UK at Oxford University and the School of Oriental and African Studies (SOAS), I moved to Hokkaido University to complete my doctorate at the Graduate Faculty of Law. My research focuses on the history of migration after the collapse of the Japanese Empire. Between April 2017 and September 2018 I worked as an assistant professor at the Slavio-Eurasian Research Center at Hokkaido University. The project I was involved with was about borders and, in particular, the role of border tourism as a means of stimulating local economies in Japan.

現代日本語文法

外国語としての日本語の研究を行います。普段、使い慣れている日本語には、さまざまな秘密があります。たとえば「一つ、二つ、三つ、六つ、四つ、八つ、五つ、十」という日本語の数え方を考えてみましょう。すでに気づかれたと思いますが「h, h: m, m: y, y: t, t」という音の対応があります。

では「負けず嫌い」と「食わず嫌い」はどうでしょう。どこが変なところはありますか。

私の授業では、普段、使い慣れている日本語を見直しその謎に迫っていきたいと思います。



山下 好孝
YAMASHITA Yoshitaka

担当授業 /
日本語論演習

神戸市外国語大学修士課程修了(イリス(英語学)1983) 山下好孝(2016a)「指示と参照に基づく日本語指示詞の再検討」『国際広域メディア・観光学ジャーナル』23巻、pp.61-82
<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/62975>
山下好孝(2016b)「指示と参照に基づく『おれどしおれどし』の意味解釈」『北海道大学国際教育研究センター紀要』20巻、pp.93-102
<https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/65698>
山下好孝(2017)「指示と参照に基づく『前(まへ)』と『後(あと)』の意味分析」『国際広域メディア・観光学ジャーナル』26巻、pp.141-152
<https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/68748>

企業の国際化戦略を学ぶ

企業経営において、安易な利益最大化は危険思想としたのは経営学者のピーター・ドラッカーです。企業にとつて、利益そのものは存続のために手段であって、必ずしも目的ではありません。企業や組織の持続的な成長には、社会における存在価値、存在理由を明確にすることが不可欠です。何のためにその事業を行うのかというミッションが組織の内外において重要です。このミッションの追求は企業広報の重要な中心テーマでもあります。現在の日本企業の大きな課題は事業の国際化の推進です。授業では、日本企業を中心に、グローバル企業と比較しながら、国際化戦略のケーススタディを行います。グループディスカッションにより経営に関する理解を深めます。具体的には、経営の仕組み(ミッション)、戦略、オペレーション)、コーポレートガバナンス、アジアの経済成長、マーケティング、イノベーション、危機管理について学びます。受講生には、積極的なクラス参加を期待しています。



山田 澤明
YAMADA Sawaaki

担当授業 /
国際経営論演習(経営戦略)

北海道大学工学部卒業、東京工業大学理工学研究科修士課程修了。(廣野村総合研究所入社社会システム研究室長、ヒューマン・テクノロジー研究室長、事業企画室長、野村総合研究所アメリカ社長、企画、広報担当執行役員、常務執行役員コンサルティング事業本部長、常勤監査役などを歴任。主要な著書「コーポレート・アントレプレナーシップ」(共著、2001年)、「2010年の日本」(共著、2005年)。

教師としての自分を見つめ直す

教師とはどのような存在であり、どのように成長していけるのか。この素朴な問いが本演習の根底にあります。教師は、ひとたび教壇に立つと、自身を振り返る機会に思いの外、恵まれません。それゆえ、自身が思い描いている教師像と実際の行動とで乖離が起きます。したがって、教師に求められる能力は、自身を客観的に把握した上で行動方略を立てることだと考えられます。本演習では、教師としての自分を見つめ直すことに主眼を置き、様々な観点から「教師」について考えていきます。とりあげるテーマは、第二言語習得と教師研究の関連性、教師研究の手法、教師のピリフ、成長要因、ICTを活用した教育手法、トレーニング方略などです。履修対象は、現職教師が望ましいですが、これから教師を志す学生の参加も歓迎します。



山田 智久
YAMADA Tomohisa

担当授業/
日本語伝達論演習

ロンドン大学教育研究所外国語教育学部修士課程修了(M.A.)、北海道大学国際広報メディア・観光学院博士後期課程単位修得退学。博士(学術)。研究テーマは、教師教育とICTリテラシー教育。主著/『日本語教師のためのTIPS77② ICTの活用』(単著、くろしお出版、2012)、『日本語教材研究の視点』(共著、くろしお出版、2016)、『日本語教師のためのアクティブラーニング』(共著、くろしお出版、2019)。論文/『教師のピリフの変化要因についての考察—二名の日本語教師へのPAC分析調査結果の比較から—』(日本語教育学会 学会誌、2014)など。

観光と他者と情報メディア

私は「観光創造」という観光研究のこの数十年の新しい試みの中で、「観光創造の他者論」と「観光創造のコミュニケーション論」という2つのテーマを掲げて研究を行っています。観光創造の他者論では、「ひとはなぜ観光の旅にでかけるのか」という原的な問題について、「出会い」や「偶有性」といった概念を鍛えることで考察しています。「観光創造のコミュニケーション論」では、21世紀に入ってから情報メディア環境の質的な変化を踏まえ、肥大するネット空間でのコミュニケーションと現実空間での観光を始めとする社会的活動がどのように交錯するのかについて、「拡張現実」をキーコンセプトとして活用しながら考察しています。



山田 義裕
YAMADA Yoshihiro

担当授業/
観光コミュニケーション論演習
観光情報メディア論演習

北海道大学大学院文学研究科英米文学専攻博士課程を単位取得退学。同研究科助手、同大学言語文化部助教授、同大学国際広報メディア研究科教授を経て、2004年より現職。生成文化とコミュニケーション研究がかつの専門であったが、現在は観光創造の他者論とコミュニケーション論の研究を行っている。業績は個人ページ(<http://yoshihiroyamada.jp/>)参照。



役に立つ研究? 役に立たない研究?

「一見くだらないことを大真面目に研究する」これが私のモットーです。一見、役に立ちそうにないことにこそ、実は真実が隠されているように思います。研究テーマに真銭はありません。「即戦力」という言葉が昨今大学でもてはやされていますが、結果がでるまでに時間がかかることに、こつこつ取り組むことも大学に課された重要な責務だと信じます。社会的に肩書のある人が言うことだから、定評ある本に書いてあることだから、「正しい」、のではなく、自分自身で真偽を確かめていく、本物を見抜いていく、そうした姿勢が研究者には求められると思っています。批判や孤独を恐れず、信じる道を進む研究者でありたいと思います。



山村 高毅
YAMAMURA Takayoshi

担当授業/
コンテンツ・ツーリズム論演習
ヘリテージ・ツーリズム論演習
メディア文化と観光

北海道大学農学部卒、民間企業勤務、北京大学留学を経て東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。博士(工学)。コンテンツ・ツーリズム、ヘリテージ・ツーリズムに関する国際的な研究を展開中。観光庁「スクリーン・ツーリズム促進プロジェクト」ワーキンググループ座長、埼玉県アニメ・ツーリズム検討委員会座長等を歴任。主著に、『アニメ・マンガが地域振興』PARUBOOKS(単著)、*Contents Tourism in Japan*, Cambria press(共著)、『コンテンツが拓く地域の可能性』同文館出版(共著)など。

「わりきれない」問題を考える

授業では日本における戦争体験と戦後思想の問題をみなさんと共有します。終戦から七十年をこえる月日がたち、戦争を直接経験した人も少なくなりました。戦争をめぐる記憶もメディアに現れる情報も変化します。その時点において人々が何を考えていたのかが忘れられ、体験がその後の思考で整序されることもあります。戦争史跡は保護されることもありますが、多くは取り壊されてゆきます。メディアと観光(地域)における表象の問題を、戦争を事例に考えます。授業のコンセプトは「わりきれない」問題を「わりきらず」に考える。戦争体験者(戦中派)の思考をたどり、北海道の戦争史跡を訪ね、考えてゆきたいと思います。



渡邊 浩平
WATANABE Kohei

担当授業/
メディア観光表象論演習
広報とマーケティング

東京都立大学人文科学研究科修士課程修了後、博報堂に入社し12年勤務。その間、上海駐在員事務所、北京駐在員事務所で働く。1997年愛知大学現代中国学部講師。2001年北海道大学言語文化部助教授。2009年北海道大学メディア・コミュニケーション研究院教授。近著に『吉田満 戦艦大和 学徒兵の五十六年』(白水社、2018年)がある。

現代アメリカの政治と メディアから民主主義を考える

アメリカでは政党のみならず国民世論が、保守とリベラルに分極化しているが、その過程におけるメディアの機能は無視できない。メディアが保守とリベラルに分かれて対立軸の増幅を演出するなか、討議型民主主義の空虚化も指摘されている。アメリカでは内政が外交まで定義することも少なくないが、議員の政策は選挙区の利害に縛られる。アウトリーチという集票戦略は、こうした関係性の「縮図」であるが、その過程でメディアは、無料の宣伝媒体として政治に関与するジレンマも抱えている。アメリカの政治過程を事例に政治とメディアの多層関係を検討したい。



渡辺 将人
WATANABE Masahito

担当授業/
米国内政メディア論演習

シカゴ大学大学院国際関係論修士課程修了(MA, International Relations)。早稲田大学大学院政治学研究科にて博士(政治学)取得。テレビ東京報道局政治部記者、コロンビア大学およびジョージワシントン大学客員研究員を経て2010年から現職。専門はアメリカ政治。主著に『現代アメリカ選挙の変貌』、『評伝バラク・オバマ』など。

自然と都市のクロスポイント



この学院の大きな特色は、優れた生活、学習環境にもあります。札幌駅北口近くの北海道大学の緑豊かな日本一広大なキャンパスが学びの場です。ここでは、人口200万都市札幌の都市環境と、北海道の大自然のクロスポイントにあり、都市と自然の両方が楽しめる大変恵まれた環境です。多くの学生はキャンパスから徒歩圏に住んでいますが、住居費用は東京圏に比べると大幅に安く、都会と自然の中で、快適な学生生活を送ることができます。



北海道の未来を考える

北海道は未来日本の縮図と言われ、課題先進国日本の中の課題先進地域です。したがって、この地域の問題は、北海道のみならず、日本、アジア、世界の課題解決に通じます。当学院では新学院のスタートに先立ち、「北海道の未来を考える」公開シンポジウムを開催しました。このシンポジウムには、スピーカーとして、北海道の人口動態を研究してきた北海道総合研究調査会理事長の五十嵐智嘉子様、ロンドン特派員としてヨーロッパで地域再生の現場を見てこられた北海道新聞の志子田徹様、当学院からは、これまで実際に地域の再生事業にも関わってきた観光学高等研究センターの木村宏特任教授が参加しました。ここでは、足元の厳しい現実について確認するとともに、国際的

な視点から地域の課題解決を進める、量ではなく付加価値の高い仕事を増やす、外部の人材を積極的に活かす、地域の人材育成力を高めるなど、北海道の新しい成長の方向につ

いて、市民の参加のもとで、活発な意見交換を行いました。今後も、このように北海道という地域に密着し、ローカルに、かつグローバルな視点からの学際研究を進めてゆきます。



特色ある教育プログラム

オープンラボ型フィールドプログラム

北海道大学が有する強力な産官学連携・国際ネットワークを活用し、大学施設外の地域・機関等のフィールドも、学習・研究・実践のための「開かれた研究室」と位置付けた「オープンラボ型フィールドプログラム」を提供しています。

フィールドワークと座学を往還しつつ、研究・事業の企画・立案から、実施、成果物作成、成果の社会還元まで一貫したアクティブラーニングの機会を提供し、地域・世界の課題解決に直接貢献できる人材を育成します。



オープンラボ型フィールドプログラムによる演習



TLLPによる報告会

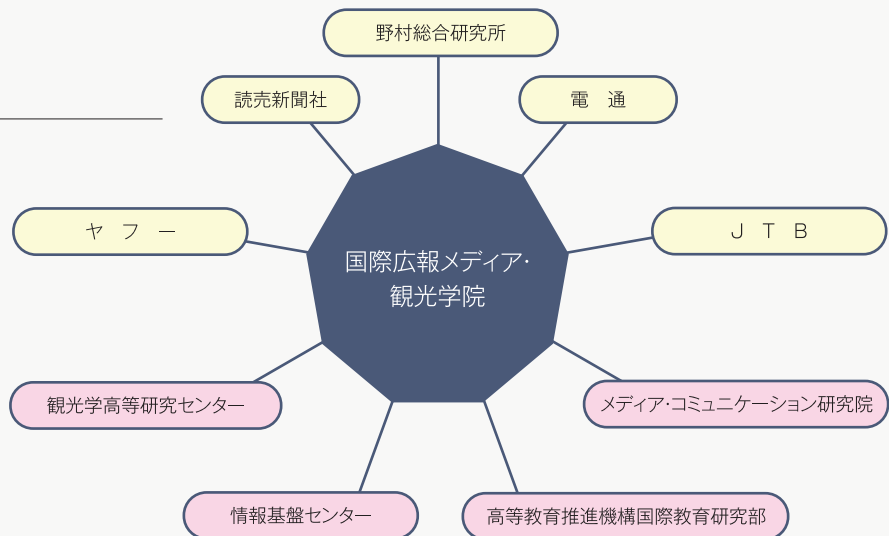
TLLP (Tandem Language Learning Project)

TLLPとは、イギリスのシェフィールド大学、リーズ大学、フィンランドのヘルシンキ大学、オーストラリアのオーストラリア国立大学、メルボルン大学との間で行っている研究教育の交流プログラムです。参加学生は、海外の大学の学生とペアを組み、互いの研究のサポートをするタンデム・ラーニングを行った後に、スタディ・ウィーク開催大学に集まり成果発表会やワークショップに参加します。TLLPを通し、アカデミックな英語やスキルの習得だけでなく、参加者同士の研究交流を深めることで、将来に向けてネットワークを築いていくことができます。

教育体制

学内の研究組織及び学外の企業・機関が、国際広報メディア・観光学院の教育を支援する体制をつくっています。

多彩な専門領域からの専門家が学生への教育を行い研究を総合的にサポートします。



学生の声 (学年は2018年度)

奨学金を活かす

周 浩 森

修士課程1年



私は大学院にて二つの奨学金を申請することができ、誠に感謝しております。奨学金のみならず、アルバイトなどを通じて生計を立ており、留学生であっても海外で自立できることを証明できたと思います。

日本において、教育に関する奨学金制度は多くあり、受理される可能性も高いです。北海道大学は知名度を始め、総合的な評価が高いこともあり奨学金制度も大変充実しています。また、北海道大学では様々な奨学金を得ることができるプログラムも行っていきます。例えば、国際インターンシップや就職促進プログラムの参加者に与えられる奨学金などがあり、自分の能力を試すチャンスにもなります。北海道大学は前述のように沢山の奨学金制度を提供している素晴らしい学校です。みなさんも北大で、楽しい生活を送りましょう。

札幌での生活

頼 齊 艶

修士課程1年



北海道大学での勉強と生活は非常に快適です。まず、キャンパスは札幌駅の近くにあり、JRや地下鉄に近く、どこへ行くにも便利です。また、家賃が安いので、大学の周りに住むことができます。徒歩で通学できるので、時間と交通代がかなり節約されます。そして、百貨店や商店街、観光地に近く、買い物やアルバイトのチャンスも多くあります。このため、勉強とアルバイトを両立することが容易になります。

また、北海道は自然に恵まれた土地で、四季それぞれが非常に綺麗です。知床のような世界自然遺産もあり、流水のような珍しい風景も見られます。旅行に行ったりすると、色々な体験ができます。そして、北海道大学のキャンパスも美しく、観光地としても非常に有名です。

北海道には豊かな農産物と乳製品があります。また、お菓子が美味しい。食べ物で、特に人気なのはスープカレーとジンギスカンです。北海道ならではの味わいで、一番オススメです。

シンガポールから見た北海道の魅力

四季がないシンガポールから来た私にとって、北海道の最大の魅力は、四季の移り変わりです。一年間を過ごしてきて、自分の生活と成長は北海道の景色と同じように変化してきています。北海道の四季は、ピンク色の春、緑の夏、金色の秋と白色の冬だけではなく、一年の中に数回の祭りがあって、北海道の生活をより豊かにしています。

赤道直下のシンガポールと比べて、北海道の気候は大変涼しいです。特に夏は、日本全国の平均よりも涼しく、蒸し

暑くないといわれます。

北海道の人口はシンガポールと同じですが、札幌市内でも東京のような混雑ではありません。北海道大学は、札幌駅の近くにあり、札幌市の中心部である大通公園とススキノへは、自転車でも、歩いてアクセスが可能です。一方、学校に近い北区と西区は、静かで住みやすいところで、快適で充実した学生生活を過ごせます。皆さんも、是非、北海道で人生を変える充実した留学生活を経験してください。



オン・イーシュエン

修士課程1年

札幌での学生生活

劉 倩 文

修士課程1年



北海道大学は広大なキャンパスを持って、豊かな自然にも囲まれています。秋になると、構内の鮮やかに染まったイチョウ並木は北海道でも誇る絶景です。キャンパスで散歩しながらゆったりと自然を満喫できます。研究にも勉強にもすごく居心地の良いところです。それ以外、北海道大学の周りに学生向けのマンションがいっぱいあって、東京に比べて家賃がかなり安いだけでなく、学校に近くて徒歩でも通学できます。そして、北海道大学の周りの交通もすごく便利です。札幌駅まで歩いて行けるので、買い物とかJRなど乗るのがすごく便利です。最後に、ここでは毎日美味しい道産食品をいっぱい食べられますよ。新鮮な野菜とか、美味しい牛乳と米は家近くのスーパーでも簡単に買えます。毎日美味しいものを食べると、元気がやる気が出てきますよね！

学院で学ぶこと

周 靖 雯

シュウ セイブン

修士課程1年



国際広報メディア・観光学院(IMCTS)の一員として勉強すると、メディアの視点を通して、社会問題に関する幅広い視野を身につけることができます。

IMCTSには研究生制度があります。修士課程に入る準備期間で、先生の指導を受けながら勉強や研究を行うことができます。IMCTSは関連する範囲が幅広く、広報・ジャーナリズム・公共伝達・メディア文化・言語・観光の多様な分野があります。留学の最初の半年の間、研究生制度を通じて、日本の生活に次第に慣れ、研究分野・専攻について考え、自らの研究計画を深めることができました。

また、IMCTSの先生だけではなく、学生たちの経歴や専門分野がさまざま、世界中の多様な知識やものの見方に触れることができます。私は、修士に進学して、広報を中心に学んでいますが、公共伝達、メディア文化などの知識も吸収しつつ、自分の研究を推進しています。私はIMCTSの自主自立の学びの精神と多様性を受け入れる気風が好きです。IMCTSで、いろいろなことを身につけ、貴重な学びや素晴らしい人生経験を得られることを、心から感謝しています。

北大を選んだ理由

グヴァイズディカイター・ロベルタ

修士課程1年



札幌、そして北海道大学を2年間の住いの場所として選んだ最も大きな理由は、札幌の魅力的な風景や落ち着いた雰囲気でした。東京、大阪や他の大都市に比べると、札幌は最も住みやすく、特に学生たちにとってフレンドリーで、オープンな街だと思っています。そして、北大の歩行圏に住めることや安い住居費用は学生にとって最も望ましい条件であり、札幌は楽な学生生活の最もよいロケーションです。

日本一広大な北大のキャンパスで眺められる四季の変化の美しさという自然の恵みからはじめ、一年中様々な文化イベントが豊かな札幌はアクティブな生活を送るためにパーフェクトです。綺麗な自然に恵まれているリトアニア出身の私にとって、自然と触れ合える環境が大事なので、札幌に住めることはとても幸いに思っています。また、札幌は北海道の他の街への出発点になっており、涼しい夏や雪の綺麗な景色を楽しめるために素敵なお場所となっています。

就職活動と学院

荒井 麻記子

修士課程2年



私の就職活動では、志望動機や自分の経験の他に「現代社会をどのような視点で見つめているか」を問われる場面が多かったです。学部生と大学院生の就職活動における大きな違いは、自分の学び・研究を机上の空論にとどめるのではなく、どのように社会に役立てようとするかが求められる点です。私は、就職活動をする中で、急激に変化する社会への対応力や知識を応用する力、あらゆる事象への課題発見力を身につけることが大切だと思いました。本学院には新聞社・民間企業・シンクタンクとの連携講義が充実しています。私は講義を履修したことで、学術的な知識と現代社会の問題を結びつけて考える力がつきました。多くの外国人留学生と共に学ぶことができる学生生活も、グローバル社会で活躍するための準備ができました。

知識だけではなく実務経験も豊富な先生や国際色豊かな環境、充実した授業のおかげで楽しく就職活動を行うことができました。



杉山 奈津美

修士課程2年

多様性に満ちた環境

私は修士2年次にTLLPに参加し、メルボルンを訪れました。北大生とメル大生のスタディセッションにおいては、研究について発表をしたり、日本研究をする各国の研究者がスピーカーとなる国際会議を聴講したりするなど、現地では様々な機会を得ました。普段接点のない博士課程の先輩の研究内容や、先生方の国際会議における発表も聞くことができ、新たな研究の世界を垣間見ることができました。同時に、これから修士論文の大詰め

を迎える自分を鼓舞する有意義な経験となりました。

また本学院は、多様性に満ちた環境にあります。それは国籍の違いにとどまらず、例えば、就業・海外・研究等における豊富な経験、いろいろな考えや思いをもつ学生・先生たちがいます。各々のカラーをもつ人々との交流が楽しく、そしてパワーをもらいながら、多くを学ぶ毎日を送っています。

研究室と楽しい仲間

董雨佳

修士課程1年



メディアに関する専攻では、北大の国際広報メディアは常に日本国内のトップだと評価されています。ただし、実際に進学を考えるなら、改めて多種多様な情報を集めることも大事だと思います。私にとって学院とは、勉強や研究を進める場所だけでなく、楽しむ場でもあり、家庭でもあります。この学院では、学生には、研究室に机が容易にされ、その空間は自由に使えます。このような環境は、文系大学院の中には、あまりないと思います。給湯室にはテレビ、冷蔵庫、ソファなどがあり、家庭的な環境になっています。自分の手で研究室を飾ったり、テーブルの上に自分の本や水筒などを置いたりしています。学院はただ毎日通う場所だけでなく、自宅のようなリラックスした環境となっています。学生たちのお互いのコミュニケーションも活発で、研究室はいつも活気にあふれています。また、学生同士でイベントや旅行をすることもよくあり、大変楽しい仲間になっています。

国際経験を広げる

ソムシアオ・ナツタヤ

修士課程2年



本学院では、多国籍で、多様な背景を持つ学生が集まっていて、国際的な環境で研究活動を行なっています。私は、毎年行われるTandem Language Learning Project (TLLP)という国際プログラムに参加する機会がありました。このプログラムでは、メルボルン大学の学生さんと研究についてさまざまな意見交換を行い、新しい観点からの刺激を受けることができました。このように、日本のみならず海外における研究ネットワークを広げ、言語力を身につけ、国際的な舞台で研究発表することができます。私は、研究活動以外にも、日タイ通訳としてジェトロ北海道とタイ政府機関との座談会で仕事をしたり、タイ人向けに北海道の観光情報を発信することを行っています。また、札幌観光大使として、外国人留学生と一緒に、札幌の魅力を発信する活動にも参加しました。このような経験は本学院に在籍し、北海道にいるからこそできることだと考えます。ここでの学生生活で、国際経験をさらに広げることができています。

フィールドで北海道の観光を学ぶ

ミア・ティツロネ

修士課程2年



自分の研究活動でも実感していますが、観光は現場で起きるものです。そのため、いくら本や論文を読んでいても、実際にフィールドに行ったら、想像していたのとは違うことや新しい発見が多くあります。京都で修士論文のためにインタビュー調査を行った際、どのように研究対象の観光客に話しかければいいのか、人々の体験に邪魔にならないようにどのように参与観察をすればいいのか、といったことでよく悩んでいましたが、このようなフィールド調査の方法も、現場でしか学ぶことができないと思います。

国際広報メディア・観光学院の特徴は、ただ教室で講義が行われるだけではなく、実際に現場に出て、観光に関わっている人と交流するプログラムが多いところです。様々な人の体験談を聞いたり、実際に企業や観光地を訪問したりすることで、観光をより多面的に捉えられます。

授業に参加して個人的に最も印象に残ったのは、現場のみなさんが学生の意見やアイデアを大事にしてくださることです。講義で中標津のランチウェイを歩いた際、私のコメントが新聞にまで掲載されことに、びっくりしました。また、授業で学生が行った提案が実現する可能性があることで、課題に挑戦するモチベーションも高くなります。例えば同期の学生の提案に基づいて、実際にモニターツアーが開催されたこともあります。

本学院のようなダイナミックな環境で観光について学ぶことができる場所は他にないと思います。今後の北海道の観光を考える上では、学問と実務のつながりが非常に大事になってくると思っていますし、お互いの世界から学ぶことも多いと考えています。

博士課程の学びと研究者としてのキャリア形成

平井 健文

博士後期課程3年



本学院の特徴の1つに、教員と院生の距離の近さがあります。指導教員の先生以外の先生方とも、ゼミ、プロジェクト演習などの機会を通して密接な関係性を築くことができます。こうした繋がりを通して、より広範な視座から研究に対する助言を受けられるだけでなく、学会やシンポジウムなどでの発表の機会を得られたりもします。日本学術振興会の特別研究員の申請する過程でも、専門を異にする多くの先生からのご助言を頂きました。

本学院のもう1つの特徴に、国内外での研究発表に対する支援が充実していることがあります。私も、第二言語のタンデム学習プログラムであるTLLPや、若手研究者育成経費による旅費の補助などを活用して、国際学会・シンポジウムで何度も発表の機会を得ました。こうした一連の研究の蓄積は、博士論文を執筆する上で大きな意味を持ちました。加えて、修士課程の頃からプロジェクト演習や地域連携事業に携わってきたことも、今日における観光学の研究者としてのキャリアの形成に繋がっていると実感します。

学院と国際協力業界

平柳 恵太

修士課程2年



私は春から「開発コンサルタント」として、発展途上国の都市・地域開発に携わっていく予定です。大学院進学前までは、国内の地域活性化と海外での地域開発の両方に関心がありましたが、本学院でのフィールドワークと在学中の途上国のNGOでのインターンを通じて、国際協力の現場で地域づくりに携わりたいと考えるようになりました。そのため、JICAや開発コンサルティング企業を中心に就職活動を進めました。その際、本学院の先生方がJICAのプロジェクトに関わっていたこともあり、国際協力業界のお知り合いの方々を紹介していただいたことで、現場の職員・社員の生の声を聞かせていただける機会に恵まれました。このように現場を経験した方々の生の声を聞いたこと、そして、本学院でのフィールドワークやインターンで現地に入り込んで活動した経験という2つの点は、就職活動において評価していただけたように感じました。修士論文研究と就職活動を同時に進行するのは大変ですが、入学時から目標を立てて着実に進めていくことが大切です。

インドネシアから見た北海道の魅力

トウティ アラウィヤー

修士課程1年



日本でも一番北にある北海道は冬が長く、11月から3月にかけて綺麗で真っ白な景色が続きます。雪が降らない東南アジア、特にインドネシアからの観光客がこの時期に多く北海道に来るのは、この雪が目的です。私が行った調査でも、「北海道」という言葉を聞いてまずインドネシア人が頭に思い浮かべるのは「雪」ということが分かりました。素敵なロマンチック映画によく出てくる真冬の風景を想像しながら、雪の美しさと寒さを実際に体験しに来るのです。

冬に雪で染まった真っ白な景観も美しいですが、その他の季節もやはり魅力的です。春の新緑、初夏になり少し暖かさを感じる頃には、ラベンダーなどが美しく咲き誇ります。秋には色とりどりの葉が山々に色を付けます。豊かな自然に恵まれた北海道は、四季によって色が変わります。これこそ一番の魅力だと感じています。観光のデスティネーションとしてはもちろん、住む場所としても非常に快適で美しい北海道。ここで学べることを日々、魅力的に感じています。

学生募集要項



国際広報メディア・観光学専攻 Division of International Media, Communication, and Tourism Studies

課程 (標準修業年限)	入学定員	授与する学位
修士(2年)	47	修士(国際広報メディア)、修士(観光学)、修士(学術)
博士後期(3年)	12	博士(国際広報メディア)、博士(観光学)、博士(学術)

入試情報

- 修士課程の入学者の選抜は、研究計画書、活動レポート、成績証明書、筆答試験、口述試験、英語外部試験スコアシート等を総合して行います。
- 博士後期課程は、研究計画書及び口述試験が中心です。
- 募集は一般、社会人、留学生に分けて行います。また、社会人のために長期履修制度が準備されています。

《入試日程》

修士課程前期入試：2019年8月22日(木)、23日(金)
 修士課程後期入試：2020年2月12日(水)、13日(木)
 博士後期課程前期入試：2019年8月22日(木)
 博士後期課程後期入試：2020年2月17日(月)

英語試験について(修士課程入試)

英語学力判定は、TOEFL(iBTまたはiTP)/TOEIC(公開テストのみ)等のスコアにより判定します。詳細については本学院ウェブサイトにて公開しています。

2020年度入学 入試説明会

本学院では、入試の詳細を知り、研究計画書指導のアドバイスを受け、指導の体験をしていただくため、入試説明会を開催します。

	開催日	会場
前期説明会	2019年6月1日(土) 6月16日(日) 6月8日(土)	札幌 東京
後期説明会	2019年11月2日(土) 11月10日(日) 11月9日(土)	札幌 東京

[問い合わせ先]

北海道大学メディア・観光学事務部教務担当
 011-706-5116 / 5137
<https://www.imc.hokudai.ac.jp>

修士課程修了生の主な就職先(順不同) ※外国企業(海外所在)を除く

■《情報サービス、通信》

日本アイ・ビー・エム・ソリューションサービス株式会社
 株式会社モンスターラボ
 株式会社日立ソリューションズ
 株式会社日立公共システム
 株式会社富士通システムズ・イースト
 株式会社ホープス
 株式会社バスコ
 株式会社ダイテック
 株式会社ステラリンク
 富士ソフト株式会社
 合同会社DMM.com
 株式会社フラビルソリューション
 株式会社ファイバーゲート
 カチシステムプロダクツ株式会社
 フーリンラージ株式会社
 楽天株式会社
 株式会社リクルートホールディングス
 株式会社グローバル・ディリー
 トランスコスモス株式会社
 フューチャー株式会社
 クリプトン・フューチャー・メディア株式会社
 アビームコンサルティング株式会社
 株式会社サーベイリサーチセンター
 株式会社計画情報研究所
 アクセンチュア株式会社
 公益財団法人日本道路交通情報センター
 エヌ・ティ・ティ・コミュニケーションズ株式会社

■《放送、新聞、広告、デザイン》

札幌テレビ放送株式会社
 株式会社テレビ東京
 読売新聞社
 株式会社北海道新聞社
 株式会社交通新聞社
 株式会社北國新聞社
 株式会社USEN
 株式会社電通
 株式会社博報堂
 株式会社インサイト
 株式会社東急エージェンシー

株式会社デイリー・インフォメーション北海道
 有限会社バイン・リンク
 株式会社石田大成社

■《宿泊、旅行、娯楽、観光》

加森観光株式会社
 野口観光株式会社
 株式会社近畿日本ツーリスト北海道
 株式会社JTB北海道
 株式会社JTB総合研究所
 JTBアジア・パシフィック本社
 株式会社FMG
 株式会社星野リゾート
 札幌国際観光株式会社
 株式会社北海道日本ハムファイターズ
 一般財団法人丘のまちびえい活性化協会
 おもてなし山形株式会社
 特定非営利活動法人占冠・つくりつ観光協会
 合同会社観光創造ラボ

■《運輸、郵便》

東日本旅客鉄道株式会社
 北海道旅客鉄道株式会社
 日本空輸株式会社
 日本郵便株式会社

■《製造、電力》

株式会社東芝
 富士通株式会社
 日本アイ・ビー・エム株式会社
 日本たばこ産業株式会社
 森永製菓株式会社
 株式会社バンダイ
 トヨタ車体株式会社
 ヤンマー株式会社
 リンナイ株式会社
 株式会社アドテックプラズマテクノロジー
 北海道電力株式会社

■《建設、不動産》

戸田建設株式会社

イオンディライト株式会社

■《卸売、小売、通販》
 株式会社ファーストリテイリング
 株式会社阪急阪神百貨店
 株式会社サッポロドラッグストア
 生活協同組合コープさっぽろ
 ソフトバンクコマース&サービス株式会社
 株式会社ニトリ
 株式会社北の達人コーポレーション
 株式会社ユース
 株式会社オカモトホールディングス
 アイジャパン株式会社

■《金融、保険》

日本生命保険相互会社
 日本船主責任相互保険組合
 株式会社みずほ銀行
 株式会社商工組合中央金庫
 株式会社北洋銀行

■《学校教育、教育支援》

北海道大学
 明治大学
 高等学校(複数)
 中学校(複数)
 一般社団法人未来教育サポート
 株式会社ベネッセコーポレーション
 株式会社ファミリー
 双葉外語学校

■《公務、団体、組合》

北海道庁
 札幌市役所
 柏崎市役所
 帯広市役所
 独立行政法人国際交流基金
 公益財団法人福武財団
 全国共済水産業協同組合連合会
 全国農業協同組合連合会
 公益財団法人文化財建造物保存技術協会

就職実績

2012年～
2017年度修了

博士後期課程修了生の就職先(順不同)

■《大学(教員、研究員)》

北海道大学
 北海道教育大学
 小樽商科大学
 札幌国際大学
 札幌大学
 北海道科学大学
 広島大学
 慶応義塾大学
 東海大学
 実践女子大学
 名古屋短期大学
 東北師範大学(中国)
 安徽大学(中国)
 廈門大学(中国)
 北京第二外国语学院(中国)
 マカオ工科大学(マカオ)

■《政府機関》

独立行政法人国際交流基金

■《民間企業》

株式会社ダン計画研究所

デスティネーション・マネージャー育成プログラム (履修証明プログラム)



札幌観光協会による講義。実務の現場担当者を交えた講義も数多く含まれている。

国際広報メディア・観光学院では、観光庁が推進する日本版DMO(デスティネーション・マネジメント・オーガニゼーション)や、今後DMOを目指そうとする関連組織の中核的人材の育成を目的に、「デスティネーション・マネージャー」*1 育成のための履修証明プログラム*2を開講しています。

※1.デスティネーション・マネージャーは、北海道大学の登録商標です。
(商標登録:5940564号)

※2.履修証明プログラムとは、文部科学省の履修証明制度に基づく社会人向けプログラムです。

プログラムでは、DMOの中心的な役割である観光地域マネジメントに関する講義のほか、地域資源の保全と持続的な活用のあり方、インバウンド観光の拡大を踏まえた国際観光マーケティング戦略など、多様なテーマの講義が数多く展開されています。また、現役の旅行会社・航空会社の社員による講義も複数含まれており、観光関連産業における商品開発や流通の実情、地域との関係性構築のあり方などについて、より実践的なノウハウを学ぶことができます。

社会人でも参加できるよう夜間や休日の集中講義も多数開かれており、1年間、138時間以上の講義を受講することで、北海道大学総長名による「履修証明書」(Certificate)が交付されます。さらに所定の試験に合格すると「デスティネーション・マネージャー」の称号も授与されます。

観光協会や観光関連の公的機関の職員、自治体職員、民間のコーディネーターなど、数多くの方が本プログラムを受講し、道内の各地域で活躍しています。



実際の道内の観光地で行われるフィールド型演習



北海道大学大学院
国際広報メディア・観光学院
学院案内 2019

北海道大学メディア・観光学事務部 教務担当
〒060-0817 札幌市北区北17条西8丁目

TEL : 011-706-5116 / 5137
E-mail : nyuushi@imc.hokudai.ac.jp
<https://www.imc.hokudai.ac.jp/>

